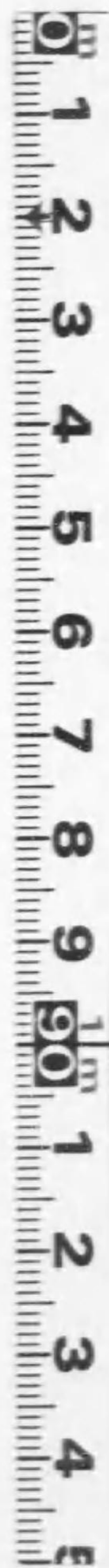


シニサ

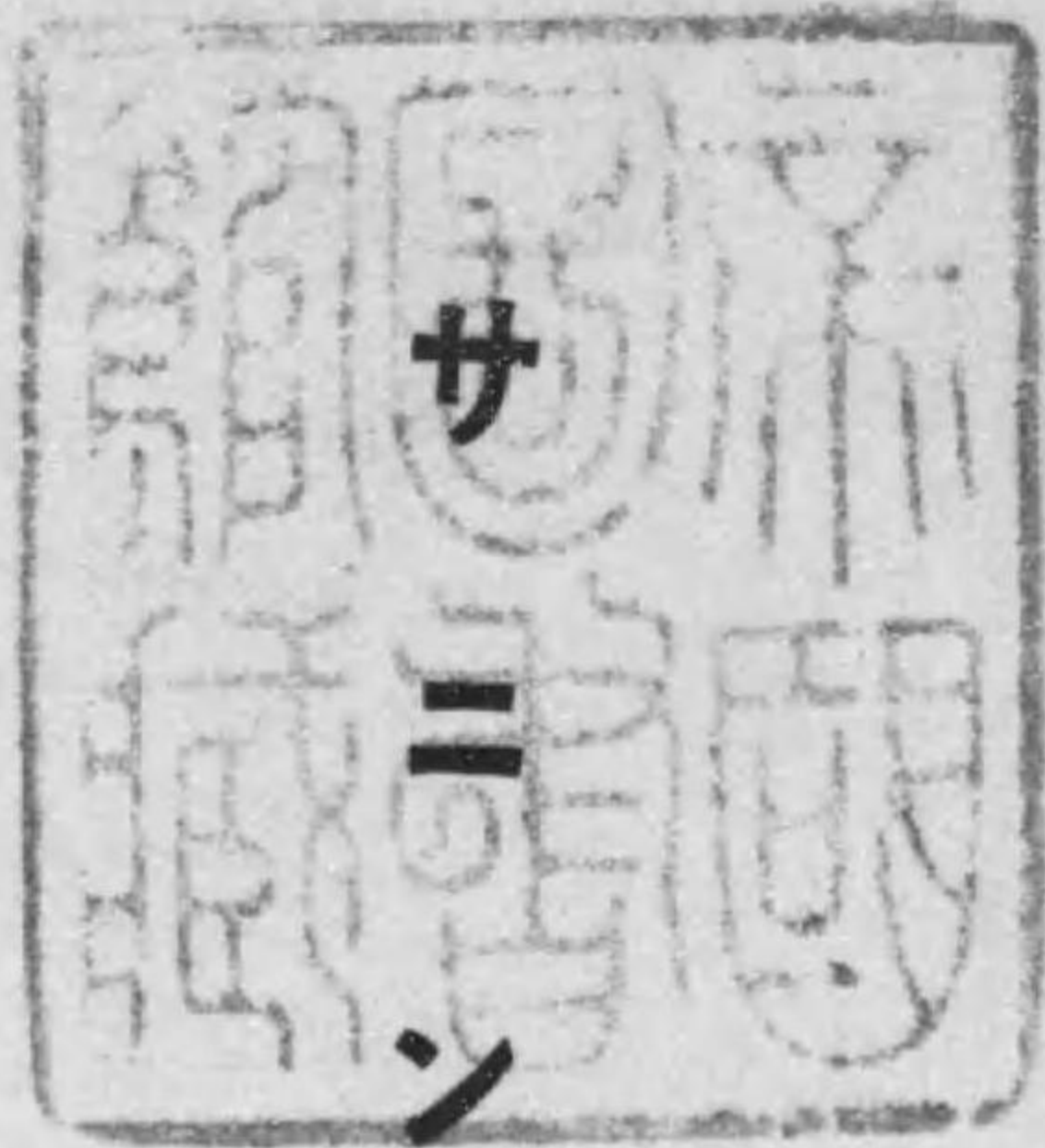
武林無想庵譯



始



47115
742



上
卷

武 林 無 想 庵 譯
ミカエル、アルツイバシエヴ作

大正
3. 2. 14
内交

サ
ニ
ン



………我は神が人間をばよく整へたま
ひし事を發見したり。然るに彼等は多く
の藝術を求むるなり。

説教者、七の三十。

ツラディミル・サニンは、性格といふものが、初めて接觸する自然と人間との
影響をうけて作りあげられるといふ、彼れの生涯の最も大切な時期をば、両親
の家にゐないで過した。何人も彼を監督はしなかつた。いかなる手も彼を陶冶
はしなかつた。そして彼れの精神は丁度野中の一本木のやうに自由に獨立して
育つた。

彼は永年の間自分の家の外で暮らして了つた。で、彼は立歸つたのであるが、

彼れの母親も彼れの妹のリダも殆どもう彼をば見知らなかつた。成程、彼れの顔立や、彼れの聲音や、又彼れの舉動などは大して變つてもゐなかつたけれど、面もまだ見た事のない何物かがあつて、彼れの容貌に或新しい表情をば與へたのである。

夕方近くであつた。到着すると、サニンは恰も五分前に家を出たばかりだと云つた調子で落ちつき拂つて家の中へ這入つた。其高い身長も、其四角な肩も其茶褐色の頭髮も、又其唇の隅が僅かばかり小馬鹿にしたやうな心地よさを見せた其顔の靜かな表情も、一向疲勞や感動の痕跡を示さなかつた。彼を迎へたリダや母親の大騒ぎも自から靜まつた。と、彼が物をたべたりお茶をのんだりしてゐる間、妹は彼と差向ひに腰をかけて彼から目を離さなかつた。感情の稍高い凡ての若い娘達が留守中の兄弟を憂ふやうに、彼女は彼に焦れてゐた。リダはいつもグラデ・ミルをば偉丈夫の一人として考へた。で、其考へは

いろ／＼な書物によつて造りあげられたものであるが、彼女は彼れの生涯のうちから世に理解せられざる大精神の悲劇的の争闘や苦悶や孤獨をば見たいと思つた。

——なぜお前はそんなに私を見るんだい。と、サニンは微笑しながら彼女に訊いた。

此注意深き微笑は彼れの柔しい眼の穿つやうな光と結びついて、彼れの容貌の不斷の表情を拵へた。ところが不思議な事には、此調子のいゝ思ひやりのある微笑がリダには面白くなかつた。此微笑は彼女には傲慢に見えた、満足らしく見えた、そして少しも苦悶や争闘に耐へて來たやうには見えなかつたのである。リダは黙つて了つた。物思はし氣な顔をして、ツと目を外向けながら、ぼんやりと書物を繰へしはじめた。

食事が済むと、母親は懐しさうにサニンの頭髮を撫でて云つた。

「ねえ、どんな暮し方をして来たのか、妾達にお話しよ、お前が世の中でして来た事をさ。」

「私がやつて来た事ですか。相變らずニコ／＼しながらサニンは受けた。食べたり、飲んだり、寝たり……さうな、時々仕事をしたり、又時々は何にもしないであたりね。」

最初彼は自分の事など話したくもなさうであつたが、彼れの母親がさまざまな問をかけたので、今度は反對に進んで話す氣になつたらしかつた。でも、自分の談が人に印象を與へやうが與へまいが更に頓着はないといふ風ではあつた。彼は物柔しくもあり、又親しみ深くもあつた。けれども彼れの舉動には肉親の間柄になくてはならぬ筈の切つても切れぬ情愛といふものが全く缺けてゐた。で、其物柔しさも又其親しみ深さも、丁度燈火の光輝が凡ゆる物の上へ平等に散り擴がるやうに、彼れの軀から蒸發してゆくやうに思はれた。

彼等は庭の露臺へ出て、階段の上へ腰を卸した。リダは少し下の方へ離れて座を占め、黙つて兄のいふ事に聴耳を立てゝゐたが、一種の寒氣がゾツと彼女の身内に浸徹つた。感じ易い其女性の本能が彼女の兄は自分の想像してゐたやうな兄ではなかつたといふ事をばさそくに見てとつたのである。そして彼女は恰も或外國人の前にでもゐるやうな無氣味さを覺えた。

黄昏が来た。靜かな影が彼等のまはりに落ちた。サニンは紙巻烟草に火を點けた。ど、其烟草の軽い匂と庭の薰香とが縫合つた。

サニンは物語つた、いかに人生が凡ゆる方面へ彼を小突きまはしたか、いかに屢ば彼は飢餓と孤獨の放浪とに遭遇したか、いかに彼は政治上の争闘に浮身を窶したか、又其政争が煩さくてたまらなくなつた時、いかに彼はそれを抛棄したか。

身動きもせずじつとき、澄してゐたリダの姿には、恰も夏の夕暮に見る凡

ての艶女のやゝ異常な美しさがあつた。

きけばきくほど、火焰のやうに考へられてゐた其生活が、實は單純な又平凡なものであつた、と彼女には思はれて來た。そこにはいかなる事がどういふ風に動いてゐたか、リダにはそれが捉まへられなかつた。其談話のうちの一切の事は、卑俗でもあり、退屈でもあり、又全くきまりきつてもゐた、と彼女には思はれたのである。そんなやうな調子で、彼はすきな處をすきな眞似をして、働いたり怠けたり、氣隨氣儘に渡り歩いた。彼は飲む事がすきなやうであつた。又澤山の女に接したやうでもあつた。けれどもリダの空想的な内心が熱望してやまなかつた、かの暗い恐しい運命の影などは、一向其生活のうちへ射して來なかつた。彼は人生についていかなる一般の觀想をも持つてゐなかつた。彼は何人をも憎まなかつた。又何人に對しても苦しまなかつた。

自から溢れ出た彼れの表情はリダにはたゞ下らなく見えた。そんな風にサニ

ンは其時々、其時々の事をば諄々として語りつゞけたが、彼れの苦んだ事と云へば、彼は襤褸を下げてゐたので、其衣服などを自分の手で繕はなければならなかつたといふ位なものであつた。

すると、貴兄は裁縫を御存じなのね、と、リダは思はずいやな顔をして輕蔑したやうな調子で訊いた。つまり裁縫をするなど、いふ事は英雄らしくもなく又男らしくもないやうに考へたからである。

——以前は知らなかつたさ。だが、必要に迫られて覺えた譯だね。妹の心持を察して、サニンはニコ／＼しながら答へた。

若い娘は軽く肩を聳やかして黙つた。そして庭のうちを眺めやつた。彼女は灰色に冷たい空の下で、或夢をばうつら／＼と日に照らされながら、朝、目がさめる時のやうな心持になつた。

母親も亦或悲しい感じを覺えた。自分の息子が社會の中に自分の希望してゐ

たやうな名譽ある地位を占めてゐなかつたといふ考が、殊に彼女には情なかつた。彼女は彼に云ひはじめた、彼が今迄やつて来たやうな生活を續けてゆく事は出来るものでもないから、もつと準繩に締め括りをつけてゆかなければならないなど、。彼女は最初息子の感情を害ねはしまいかと心配して、用心しいし云つてゐたのであるが、息子の方では一向心にもとめない様子なので、終ひには腹が立つて来た。で、何か自分の息子が抑捺面にわざとそんな態度でもどつてゐるやうに思つて、年寄の女には有勝な愚かしい怒りからならぬながら、彼女は頑固に繰返し、云つた。が、サニンは別に驚きもせず、又腹なども立てず、人のいふ事が不案内らしい顔つきをして、媚びるやうな、氣のぬけたやうな眼を、母親の上へ注ぎながら黙つてゐた。たゞ、

—だが、お前はこれからどうして暮らすつもりだい？
といふ問に對して、彼は答へた。

—どうにでもしてね。

此簡單な言葉は、彼れの母親にとつては何の價打もなからうが、彼にとつては確乎とした、遠大な、或深い意味があつた。それは彼れの靜かな力の籠つた聲のうちに、又眉をも動かさぬ、朗らかな眼のうちに、あり／＼と讀まれた。

マリア・イヴノツナは嘆息したが、鳥渡間を置いて、悲しさに云ひ足した。

—まア、それはお前の事さ、お前はもう小兒でもないからね……お前達ね、お庭で散歩でもするおつもりなら、今が一番いゝ頃だよ。

—さうな、リダ、お出で。そして私に庭を見せておくれ。ど、サニンは彼れの妹に云つた。私はもう庭を忘れて了つた。

リダは自分の空想から我に返つて、ホツと溜息をついた。そして立上つた。二人は押並んで小徑を通りぬけ、もう暗くなつた、濕つばい緑葉の奥の方へ歩きはじめた。

サニンの家は此都會の重なる市街にあつたが、都會が小さいので、此家の庭は川のところまで延び、その後ろはすぐ圃地になつてゐた。此家は昔し貴族の任居であつたが、頽廢した物思はしげな古い圓柱と、素晴らしい露臺とがついてゐた。輪伐樹木の繁つた大きな庭園は、恰も地上へ落ちかゝる濃緑の雲のやうに、其暗塊をばくつきりと浮出させてゐた。夕になると此庭は薄氣味わるくなつた。愁はしげな昔しの精魂があつて、それが厚い叢みや此古家の埃だらけな穀倉などのうちへチロ／＼と立迷つてゐるやうでもあつた。

上層はさまざまの大きな暗い座敷で出来上つてゐた。庭園中に唯一條の狭い小徑があるばかりだが、枯枝で蓋はれた其小徑には、蛙の群が集つて、人の足に踐躓られた。現今の平和な懐しやかな家族生活は、此住居の他の一隅で營まれてゐたのである。それは此家の側のかしこであつた。そこには地上にまき散らされた黄ろい砂がギラ／＼と煌めき、その繁つた花壇には五色の草花が燦

爛と咲亂れてゐた。又綠色に塗つた木製の卓子が花と向ひあつて置かれた。夏、天氣のいゝ時、人々はそこでお茶をのんだ。で、其時其小さな一隅は單純で且つ平穩な生活に生々としてゐたが、其生活と、此宏大な、人氣のない、避くべからざる荒廢に委した邸宅とは、著しい對照をなしてゐた。

彼等の後ろへ綠葉の蔭に母家が見えなくなり、サニンとリダの周圍には、たゞジツと押黙つて、恰も生ある物が冥想でもしてゐるやうな、老木ばかりが立つてゐた時、サニンは不意に妹の軀を抱きかゝへた。そして撫はるやうな、又脅かすやうな、一種異様な聲で云つた。

——お前は實に美しい娘になつたねえ。一番初めにお前に愛される男は全く幸福だ……

鐵のやうに硬い逞しい腕に締めつけられたので、火のやうな流れがリダのなよやかな肉體に注ぎ込まれた。彼女は狼狽してわな／＼と震へた。そして恰も

目に見えぬ猛獣でも近寄つたやうな心持になつて、我知らず後退りした。

二人は川のところまで行つた。ど、濕つぽい感じが森々と身に迫つた。光つた蘆が物思はしげにゆら／＼と水面を撫でた。對岸には圃地が遠く暗くほのぼのと展開してゐた。空は最初の星の物柔らかな光に鏤められて、穏やかに深く見えた……

サニンはリダから離れたが、兩手で枯木の幹を引摺んで、ボキリと音を立ててそれをへし折りざま、川の中へ投げた。水面には波紋が八方へ擴がつて、やがて消えた。蘆は傾いた、恰も親族の一人へ對する如くに、サニンへ挨拶したやうであつた。

二

六時頃であつた。太陽はまだ炎ゆるやうだけれど、緑が／＼つた軟かい影は既に庭に上つた。大氣は光と静けさと暑さにと滲みどほつた。

マリア・イヴノヅナはお菓子を製へてゐた。莓や沸る砂糖の旨さうな強い匂が菩提樹の繁茂へ散つた。

サニンは朝から花壇にかゝつて、塵埃や日光の激しさに凋れた草花を甦らして見やうとしてゐた。

——先へ雑草を抜いて了つたがいゝぢやないか。マリア・イヴノヅナは折々炭火のチラ／＼する青い煙を透してサニンの様子を見てゐたが、さう云つて注意した。グルンカにお云ひつけな。あの娘が抜いてくれるよ。

サニンは汗に塗れた愉快らしい顔を母の方へあげて、

——なぜ抜くのです。彼は額へ糊着いた髪の毛をかきあげながら、こんな雑草でも皆それ／＼思ふまゝに生長するのですよ……私は緑いものは皆すきだ。

——をかしな事をいふちやないか。やさしく肩を登かしながら母は答へた。さうは答へたが、サニンの言葉は母を喜ばしたのである。

——をかしなのは貴君方です。とサニンはキツパリ答へた。彼は手を洗ひに建物の方へゆき、それから柳の枝で編んだ肘懸椅子へ樂々納まるべく卓子の傍へ歸つた。

彼は自ら幸福に感じた。すが／＼しく感じた。愉快に感じた。木々の緑、太陽、青空、さういふものが丁度こよなき幸運のうち花とさくやうな光彩を彼の魂に沁み込ませた。

耳を聳するやうな喧嘩な大都會、その中のうき／＼した忙しい生活、彼にはそれが厭はしかつた。今や彼のぐるりを支配するものはたゞ太陽と自由とのみ

であつた。彼はもう未來の事など考へなかつた。自分に與へられるだけの生命をたゞうくるにまかしてゐた。

サニンは眼をしばたいた。心から喜ばしうに剛健な筋骨を伸ばしたり縮めたりした。

霧を帯びて新鮮なそよ風が吹いた。庭は一面にやさしく嘆聲を洩らしてゐるやうであつた。雀の群がをちこちで囀つた。彼等の小さな生活をば人間にはわからぬ言葉で、お互にひそ／＼と口早に語合つた。それを雑色のミルといふ獵犬が舌を紅く垂れ聴耳を引立て、草原の中できゝすましてゐた。上の方で木々の葉がさゝやいた。其葉の圓い影が小徑へつゞく小石原の上を音もなく揺めいた。

マリア・イヴノヅナは息子の泰悠さ加減が悲しく腹立たしかつた。實際母親は他の子供等と同様にサニンを愛してゐたのだ。自分の自尊心を傷けられても

そのまゝ満足して、息子の人生に對する意見とそれから、其言葉の價打を認め
てやらなければならなかつたといふのは、全く息子を愛してゐたからであつ
た。母は自分の今迄の長い生涯をば、ちやうど砂を掘る蟻のやうに、家庭の繁
昌といふ脆弱な建物を組立てる爲にのみ用ひて來た。此長い單調な建造が兵營
や病院見たやうに最下等の小煉瓦でこしらへられてあると同様、母親の生涯も
亦無能な建築師たる自分自身の爲に日々の材料として組立てらるゝ些細な心配
事で出來上つてゐる。其無數の心配事は母親を窮屈がらした。イラ／＼させた。
時には戰慄までさせた。さうして常におど／＼してばかり暮らした。さうして
暮らすより外には暮らしやうがないのだと母親は考へてゐた。

——ねえ、いつものやうに晩くなるだらうかしら。お菓子料理に餘念のな
い風をしながら、むつとした口頭で、不意と母親が訊いた。

——晩くなる？ どういふわけで。と云つて、サニンは噓した。

マリア・イヴノツナにはサニンがたゞ怒らせる爲にわざと嘘をしたやうに思
はれた。さう思ふのは思ふ方が無理には相違ないが、母親は氣に觸つた。

——家は實に可い。夢見るやうにサニンは呟いた。

——悪くもなからうさ。愠として見せるにはいゝ折だと思つて、マリア・イヴ
ノツナは冷淡に答へた。自分の息子が自分の家や庭を讚めるのをきいてゐるの
は、母親にとつては嬉しいものであつた。その家や庭はちやうど自分には傍に
置いて可愛がつた犬猫ほどに思はれるのである。

サニンはそれと知つて、そこで身を容れていふには、

——母親達が何だかだと些細い事を云つて、私をうるさがらせなかつたら、
まだもつと可いと思ふでせうよ。

こんな事を云つても、其聲がいかにも物靜であつたから、感情を害する筈の
文句の意味を打消して餘りあつた。それゆゑマリア・イヴノツナは笑つて然る

べきか或は怒るべきか、實際わからなかつた。

——妾が見るところではね……母は鬱陶しように云つた。お前はね、いつもあまり丈夫ではなかつたけれど、今では……

——今では？ とサニンは何か非常に面白い事がきかれさうに豫想でもしてゐるらしく、氣輕にうけた。

——今ではね……ずつと立派な男振になつたよ。母親は匙を揺しつゝ突慥貪に云ひ了つた。

——ほう、それで安心した。とサニンはほゝゑんだが、

——やア、ノギコツが来たな。と一寸間を置いて云ひ足した。

と、丁度、母家から丈の高いブロンドの好男子が出て来た。やゝ肥つてはゐるが、かなり儂んだ胴に密着せる、赤絹のロシア風の襯衣が、日光をうけてテラ／＼と反射した。さうして此新参者の碧い眼はポーツとして素直であつた。

——貴君方は間斷なし云合ひばかりしてゐるんですね。優しく可愛らしい聲で彼は遠くから云つた。一體、何事なんですか。

——なに僕の鼻が希臘風になつて、大層立派になつた、と母が氣がついてくれたわけさ。だから僕はさういふ風に鼻をこしらへて下さつた神様に感謝して始末なんだ。

彼は自分の鼻を示せて、ニッコリしながら、ノギコツの大さな肥つた掌を握つた。

——まだ何か云つてるよ、とマリア・イヴノヅナが腹を立て、叫んだ。

ノギコツはから／＼と笑つた。と其やさしい徹る聲が愉快らしく緑蔭の中に反響した。どうしても氣の善いシンミリした誰かゝその邊で彼と喜びを共にしてゐるやうにきこえた。

——なにサニン君の心は僕にはよく分つてゐますよ……人間といふものは

いつでも自分の幸運には気が気ぢやないものですからな。

—あれだ。とサニンはをかしく體裁のわるいやうな様子で云つた。

—然し、それは君にはさうあるべき筈ですよ。

—や、ごうも、とサニンは更に叫んだ。母と君とがさう共謀になられちや僕は遁出すより仕方がない。

—いゝえ、妾が引退る事にしませうよ。

マリア、イヴノツナは急に厭な顔して、いかにも面白くなさうに云つた。

そこで火の中から手のついた菓子鍋を曳出し、傍目もふらず母家の方へ行つた。

草原にねてゐた獵犬はビヨイと立上り、聴耳を立て、母家の方を見たが、やがて鼻面を前肢の上へ摩りつけて、仔細らしく母家を窺ひ、さて庭の或方面を指して、會得み顔に馳けて行つた。

—君は巻煙草を持つてるかね、とサニンは母親が立去つたので、甚だ満足らしく訊いた。ノギョツは無性な巨きな軀を太儀らしく伸ばして、巻煙草入を出した。

—母親を擁抱つたりして、君はいかんよ、彼はやさしくサニンを叱つた。

年寄ぢやないかね。

—僕が母を擁抱つた？ どういふ風に。

—あれだ……

—「あれだ」とは何だい……母親の方から何だかだと云ひかゝるのだ。僕はね、君、僕は誰に對しても何事も要求しないのだ。そして誰にもかまはれたくないのだ。カッソツとして置いてもらひたいのだよ。

二人は黙つた。

—ところで、君はどうだね、ドクトル。

サニンは煙草の煙が頭の上でゆら／＼と妙な形になるのをジツと見やりながら、と訊いた。

多分、他の事を考へてゐたのであらう、ノギコヅは頼にも答へなかつた。

——なーさーけーなーい！ と彼は歌でも唱ふやうに句切りつゝ唸いた。

——どう情ないのさ。

——どうツツて……さうさ……一體にかう、情ないのだ。何もかも厭なのだ。この小つぼけな町が實にたまらないのだ。一口にいふと、僕何をしていゝかわからないのだよ。

——何をしたいゝかわからない？ 君がか？ 一刻も休む事が出来ぬと云つて泣してゐた君がかい？

——僕のいふのは其事ぢやない……人間は永遠に療治ばかりしてゐる事は出来ない……療治ばかり……人生には又別な生活がある。

——そして、其別な生活をやつてゆくについて、どういふ妨げがあるといふのだい。

——いや、然しそれは複雑な問題だよ。

——複雑だつて？ どうしてさうなのだ。君は若いぢやないか……美丈夫ぢやないか。壯健ぢやないか……

——それはさうだが、君、僕はさういふものに對して、それだけで満足する事が出来ないのだよ。ノギコヅはやさしく皮肉を云ひながら答へた。

——何だつて？ 僕ならばそれだけありや充分だと思ふよ、サニンはニッコリした。

——僕は考が異ふ。とノギコヅは笑ひ出した。その笑ひ聲はサニンが彼の美貌や彼の腕力や彼の健康などを褒めたのでそれが嬉しくて出たのだとは、誰でも察する事が出来やう。が、彼もさすがに乙女のやうに一寸まごついた。

——うむ、さうだ、君に欠けてる事が一つある。とサニンは身を入れて云つた。

——それは？

——人生の正當な或コンセプトジョンさ。君の「生存の均一」といふ奴が君を苦しめるのだ。が、然しね、若し爰に或人間があつて、君に向ひ。一切をすて、直に行かう、と相談するものがあつたとすると、君はさつと身ぶるひして恐れるだらう。

——どこへ行くのだ？ 乞食の許へかね？

——さう、或は醜業婦の許へ……僕は君を考へて見るに、たとへば爰に一人があつて、其人は自己の權利自由を失ひ、其餘生をばシユリユツセルヅルの牢獄に禁錮さるゝ資格があるものとすれば、それはロシア帝國に或憲法を與へんが爲だらう。僕は其人に憲法は何の役に立つだらうときゝたいのだ。然しな

がら若し其人の問題が、たゞ自分自身の生活を腐蝕する倦怠といふ奴を退治せんが爲に、新しい趣味を兎めに他處へ出かけるといふわけならば、其人は直にかういふ問題に遭遇する。「自分は果して別な方法で生存する事が出来るだらうか」といふ問題だ。よし自分は自分の俸給を棄て、従つて絹布の襯衣を棄て、折襟を棄て、及び其他をすてゝも、強固な壯健な一箇の男兒である自分の此軀は、失ふわけにはゆかないだらう……全く滑稽だ。

——僕の考によれば、チツとも滑稽な事はない。前の場合には一の趣意、一の意見が通つてゐるが、次の場合では……

——さア、次の場合では？

——さやうさ……どう云つたらいいか……さうしてノギコヅは手の指をポキン〜と鳴らした。

——君の論はね、とサニンは遮つて、君はいつも遁口上をいふよ。憲法がど

うしたとか、君がいくら口を酸くして論じようとしたつて、それよりや君に取つては君自身の生活問題の方が實は緊急な問題なんだらうちやないか……

——そこが問題だよ。恐くはね。

サニンはフ、ンといふ様子をした。

——まあ、やめてくれたまへ。人がね君の指を切つたら、他のロシア人の指をきつたより、君には悪からうよ。事實だよ。

——犬儒論だ。とノギコヴはわざと刺々しく云つたが、何だかたゞ滑稽であつた。

——或は然らん。然し眞理だよ。現にさ、たとへロシアに於いてのみならず世界の多くの他の國々に憲法がなからうが或は憲法をこしらへやうといふ意向さへなからうが、君が必ず君自身の生活が君を満足させないが爲に苦しむよ。さうしてその苦しむのは決して憲法がない爲ぢやないのだ。若し君がさうでな

いといふなら、君は自ら嘯くのだ。更に立入つていはうか——とサニンは愉快らしく眼をかがやかしながら一寸口を嚙んだが——君の不平は君の大體の生活に就いてぢやないのさ。リダがまだ君に首つたけ焦がれてくれないからさ。どうだい。さうだらう。

——君はさういふバカを云ふ……さういふバカを！下衣のやうに眞紅になつて、ノギコヴは叫んだ。初心な正直な當惑さ加減はその穩かな善良な眼からバラ／＼と涙をさへ迸らした。

——バカだつて？ リダの事になると、君は世の中の事には一切目が盲んで了ふくせに。徹頭徹尾「リダを得たい」といふ唯一つの目的がチャンと君の面に書いてある。それでも君はまだバカな事だといふのかい？

ノギコヴはビリ／＼と眉を上げた。そうして、ツト小徑を歩き出した。

若しかういふ事をリダの兄でない他の人からきいたならば彼はもつと不快に

感じたらう。けれどもサニン自身の口からリダの問題について一寸見當のつかぬ事を云はれたので、それが頗る彼には奇異に思はれた。

——君は何かね……と彼は口の内で云つた。君は鎌をかけるのだらうがね
でなければ……

——でなければどういふんだい？

微笑みつゝサニンが訊いた。

ノ井コヅは黙つて肩を揺つた。そして後目遣をした。

或他の推論が彼の心に浮んだ。サニンを定義すれば、彼は不徳な人間でなければならぬ。意地の悪い人間でなければならぬ。が、さうとはさすがに云ひがたかつた。それは中學時代からの眞摯な友愛をば感じて居たからである。さうして見ると彼は不徳な人間に對して同情を持つてゐるといふ事になる。さういふ事は不可能らしくも思はれた……そんな事を考へて彼の心は錯亂した、鬱

結した。リダの思ひ出が彼を惱ましたり脅かしたりした。けれども、彼は其乙女を愛してゐたので、又其乙女に對する深い〜感じが、いかにも彼には懐しかつたので、今あゝいふ事を云はれても、サニンを恨む氣にはどうしてもなれなかつた。彼の心は悲しくて同時に嬉しかつた。恰も熱い手が彼の心臓を捉へて、やさしく緊めつけるやうに覺えた。

サニンは黙り返つて、注意深い媚びるやうな微笑をにやりと洩らして
ゐた。

——ねえ、何とか鋒を向けたまへよ。僕は何とも思やしないから。と彼は云つた。

ノ井コヅは小徑に沿うて歩きつゞけた。心の苦しみはあり〜と面に溢れて
ゐた。

此時、ミル(獵犬)が二人の傍へよつて、心配さうに四邊を見廻したが、やが

てサニンの膝へ身を擦りつけた。恰も何か嬉しい事があるので、その嬉しさを皆に知らしたいといふやうな様子であつた。

——ミルや、ミルや、と犬を撫でながらサニンが云つた。

ノギコツは議論を續けやうとした。が、いかなる事よりも一番興味を惹く此問題をば、サニンが又新につゞき壊しはしないかと恐れもした。けれどもリダに觸れの事は彼には下らなく思はれた。辛氣くさく思はれた。全く無意義であつた。

——で………リディア・ペトロヴナさんは今どこにゐるだらうね？ ノギコツは機械的に云つた。

心の中からは中々離れないが、此際どうも云ひ出しにくかつた問題のかたを彼はやつとつけた。

——リダかね？ さア、どこにゐたら君にはよからうな？ 彼女は士官達の

並木街を散歩してゐるよ。此町の若い娘達は今頃はいつだつて皆な並木街にゐるよ。

ノギコツの眉はヒリ／＼と揺れた。

——リダさんがかい。あの利發な人格の高いリダさんが若い男達と今頃ぶらついてゐやうとは考へられないがな………

——だが、君、とサニンは微笑んだ。リダも君のやうに若いよ。君のやうに美しいよ。さうして壯健だよ。彼女は君に欠けてゐるものを持つてゐる。即ちあらゆる物に對する慾望だ。彼女は何でもかんでも知りたがつてゐる、何でもかんでも覺えたがつてゐる、何でもかんでも實驗したがつてゐるのだ………が、それ、彼女はそこへ来たよ………まア、よく見たまへ、そして理解するんだね………美しいものぢやないか。

リダは軀は兄より小さいが、ズツと奇麗であつた。しなやかによ／＼とし

た嬌態が見るもの、目を奪つて恍惚たらざるを得なかつた。奥床しい美しい目が勝ち誇るやうに人を魅した。それから透る愛くるしい聲、その聲は彼女自らも得意であつて、従つて歌を唱つて人にきかせたがつた。

リダは徐に石階を下りた。さうして幼い牝駒のやうに軽く腰を振つて歩いた。歩きながら、鼠色の長い衣服を庇ふらしい恰好をした。

二人の若い士官はピカ／＼する長靴を穿いて、鞞皮のついた騎兵ズボンをつけ、リダの後についた。カラ／＼と鳴る拍車を氣にしながらつゞいた。

——美しいと仰つたのは妾の事？ とリダは庭一ぱいにその黄金のやうな聲と女らしい清鮮さを漲らした。彼女は横からサニンを見ながら、ノギョツへ手を伸べた。リダはまだ兄の言葉の戯れてゐる時と眞面目に云つてゐる時はハツキリ區別する事が出来なかつた。

ノギョツは娘の手を握りしめた。さうして涙が浮ぶほど眞赤になつた。けれ

どもリダは彼を氣にもとめなかつた。ずつと昔からノギョツのおづ／＼した眼光に馴れきつてゐたので、彼女には別に何の苦痛をも與へなかつた。

——今晚は、グラデイル・ベトロギツチ君、と二人の士官のうちの年上のズツと立派な、髪の良い方が、威勢のいゝ種馬のやうに身を乗出して云つた。彼れの拍車は喧しく鳴つた。

サニンは既やその男が執拗くリダの尻を追廻してゐるザルデインといふ騎兵士官だと知つた。も一人の士官、タナロヴ中尉はザルデインをば模範士官と見て、何から何まで努めて其模倣をした。彼は言葉少であつた。やゝ輕忽であつた。さうしてザルデインより容貌もわるかつた。

タナロヴは自分の番だといふやうに拍車を鳴らした。けれども何も云はなかつた。

——さうさ、お前の事さ。とサニンは大眞面目で妹に答へた。

——さうですとも、さうですとも、妾は美人だわ……類のない！ とリダは兄の方へ目を送して笑ひながら、脇懸椅子へ身を投じた。さうして自分の半身をスラリと引立てて見せながら兩腕を昂げて、帽子を脱いだ。投槍のやうに長い留針を一本砂の上へ落した。で、覆面の布片をば留針と髪と毛の間へさし込んだのである。

——アンドレイ・バヴロギツチさん、一寸御願して頂戴な。と彼女は憐ほい媚びるやうな聲で中尉に云つた。

——さうさ、美人だよ。サニンは妹から目を離さず身を入れて答へた。

リダは不信用らしい顔をして又兄を見た。

——爰にゐる妾達は皆な美しいことよ。とリダが云つた。

——否、とザルデインが云つて笑つた。彼れの齒並が眞白に光つた。僕等はたゞ憐れな裝飾ですな、貴女の美を一層鮮明に一層花やかに浮出させる裝飾に

すぎませんよ。

——うむ、君は雄辯ですな。とサニンは感心して云つた。が、その聲のうちに何だか揶揄するやうな調子があつた。

——リダ・ベトロヴナさんはどんな人をも雄辯にして丁ふでせう。とリダの帽子の釣懸を外さうとして、たゞ髪の毛を引き、彼女を煩がらしたり、同時に悦ばしたりしながら、無口のタナロヴが合槌を打つた。

——ほう、君も雄辯ですな。サニンは感動したやうな風を見せて、悠揚たる聲で云つた。

——いゝ加減にしたまへ。とノギコヴは空々しく呟いたが、内心サニンの揶揄が嬉しかった。

リダは半分目を閉ぢて兄の心を探つた。サニンはその曇つた眸子のうちに明白と次のやうな心持を讀んだ。

「此人達はどれ位の人間かわからぬやうな妾だと思つて下さるな。だけど妾はこんな風にして見たいのです……面白いのよ。妾は馬鹿ぢやありません。兄さんの妹です。妾は自分のしてゐる事をチャンと承知しています。」と其眸子が云ふやうに思はれた。

サニンはニコリとした。

帽子がやつどの思で取除かれた。タナロツはその帽子を椅子の上へ置かうとして重々しく歩いた。

「あら、貴兄のした事はこれだわ……アンドレイ・バツロギツチさん。リダが例の憐つばい媚びるやうな聲で不意と叫んだ。さうして顔色が變つた。いやねえ。貴兄は妾の髪を破しちまつたことよ……家へ還らなくちやならないぢやありませんか。

「それは……どうも、以來は氣をつけます。タナロツはまごついて吃つ

た。

リダは立ち上つて、衣服を褰げ、自分に注意を集めた男達の目を嬉しく感じながら、本能的にニコリ笑つた。やがて彼女は石階の方へ走つて行つた。

リダが立ち去ると、若い男達はホッと息をついた。何だか氣が樂になつた。急に重荷を卸したやうに思つた。若い美しい女の面前で男が常に感ずる神経の緊張をばやう／＼弛める事が出来た。

ザルデインは衣囊から巻煙草を出して、樂しげに火を點じた。さうして喋り出した。が、それをきくものは彼の喋るのはたゞ會話を維持する習慣から喋るので、口で云つてゐる事には別に考も意味も全くないのだ、と思つた。

「僕はリダさんに勧めたいと思ひます。何もかもすて、眞面目に唱歌をおやりになるやうにね。あのお聲を持つてお出でになるのだから、競争場裡に立てば必ず成功しますよ。」

——立派な競争場裡にね。とノギコヅは不愛相に答へて、脇を向いた。

——なせ不可のでせうか。とザルデインは口から巻煙草を除つて、大に驚いたやうに訊いた。

——けれど、女優は何者でせう。まづ賣女ですな。ノギコヅは腹立たしげに答へた。實際、嫉妬心が彼を苦しめぬわけにはゆかなかつた。自分の好きな女が一層その美をけばくしくする目を射るやうな衣服を着て、他の男達の前に現れるとしたら、それが彼にはたまらなく心苦しいのであつた。

——それは少し酷しいですな。ザルデインは眉をあげて云つた。

ノギコヅは怨めしげな顔をして彼を見やつた。彼の目にはザルデインは自分の愛してゐる女を欲しがつてゐる男の一人であつた。さうして其男の美男であるといふ事が腹立たしかつたのである。

——いや、さうぢやないです。背景の前へ半裸體で現れたり、男の目の前で

嬌態をこしらへ、さうして金をもらへばすぐ行つて了ふ賣女のやうな眞似をしたら、それでも君は立派だと思ひますかね。さうだといふならそれつきりの話ですがね。

——君。とサニンが答へた。女といふものは總じて自分の肉體を褒められる事がすきなものだよ。

ノギコヅは赫として肩を揺つた。

——君はさういふ下らん事をいふ。

——下らん事かどうか知らんがね、それが事實だよ。僕に云はせれば、リダはきつと背景の前に立てば成功するだらう、僕はそれを見たいものだと思つてゐる。

かういふ談は彼等にとつては本能的に飽く事を知らぬ好奇心を惹起させるわけであるが、何となく彼等は心に壓迫を感じた。

ザルデインは他の人達よりは利口で且つ策に富めるものと自信してゐるのでこの難局から皆を曳出してやらうとした。

——さうすると、貴兄のお考では、女は一體何をしたらいいでせう。結婚ですか……学校教育を勉強して天才を失ふのですか。それは自然に對する罪惡でせう。自然は人にさまざまの天賦を與へてゐるのです。

——やア。どサニンが冷笑しながら云つた。實際だ。その罪惡といふ考を精神的に持つて來なくちや嘘だね。

ノギコヅは意地悪く微笑んだ。さうして彼がザルデインに答へたのは政略的であつた。

——なぜ罪惡でせう。母になるとか學位を得るとかいふ事はどんな女僕になるよりも遙かに有益ですよ。

——さア、そこだ。タナロヅはムツとして云つた。

——そんな非理ん事を云つたつて、つまらなくなるばかりでせう。どサニンが云ひ出した。

ザルデインは答へやうとしたが俄にやめて黙つた。彼等はこの問題は實際つまらなくて且無益だと思つた。さう思ふうちにも彼等は何となく自己を傷けるやうな氣がするので、鬱陶しげに黙りかへつてゐた。

リダとマリア・イヴノヅナは間もなく石段の上へ現れた。兄の最後の言葉がリダの小耳を掠めた。併し何事を云つてるのかわからなかつた。

——お話しを急に廢して了つたのね……愉快らしい聲でリダが云つた。川の縁へ行きませうよ。今いゝ景色だわ。

と、男達の前を通りながら、彼女は軽く身を反らした。さうして眼の色が一寸濃くなつた。何だか謎のやうな希望がその色の底に匿れてゐるやうに。

——夕御飯まで行つてお出でなさい。と、マリア・イヴノヅナが云つた。

——賛成ですな。とデムディンが和した。さうして拍車をカラ／＼云はせながら、リダへ腕を差出した。

——御伴をさせて戴きたいですな。と、努めて嫌味らしくノギョグが云つた。彼の顔は泣出さぬばかりであつた。

——貴兄が行つて悪いわけではないぢやありませんか。リダはニコ／＼しながら彼に答へた。彼女は自分の肩の上を見た。

——行きたまへ、君、行きたまへよ。とサニンは彼に勧めた。彼女が少し僕を兄貴だと思つてくれなければ、僕もお伴するのだがね。

リダはスツと立つた。不思議な戦慄を感じながら、兄をチラリと見て、ホ、と高笑した。マリア・イヴノツナは伴のする事なす事を立腹した。

——なぜお前はさういふ馬鹿ばかり云ふのだい？ リダが立ち去ると、母はフケ／＼と云つた。人と異つた事ばかり云はう／＼としてゐるのだね、お前

は。

——私は別に何の考もありやありません。と、サニンは答へた。

マリア・イヴノツナは彼をどうしていゝかわからなかつた。母は伴の心が量りかねた。彼の考へる事も感ずる事もさつぱり見當がつかかなかつた。他の人々は皆な大抵自分と同じやうに考へたり感ずたりしてゐるのに。

母はかう思つてゐた。人間といふものは自分と教育や財産や社會上の地位が同じやうな人が考へたり話したり行つたりするやうに、自分も考へたり話したり行つたりすべきものである。母は又かういふ意見であつた。人は自然から受けた獨特な特色を有する人間たるを得ざるのみならず、人間たるものは或共通の鑄型にはまつてゐなければならぬものである。又彼女を取巻いた人生は彼女にかういふ考をこしらへさせた。凡そ人の教育といふものは人間をば二つの集團に分けてやるべきものである。即ち智力のある集團と智力のない集團がそ

れである。智力のない組は自分達の持前の氣性を保存する事が出来る。それだから智力のある組に輕蔑されるのである。智力のある組は受けた教育によつて異つた集團をこしらへる。さうして其確信が第々の箇人的特性には歸着せず、たゞ其尊敬すべき地位に責任を有するのである。さういふ風に各の大學生は革命的でなければならず、又各の官吏は市民的でなければならぬ。藝術家が自由思想家でないといふ事も、士官が表面貴族的に誇張した考をもたぬといふ事も、彼女にはあるべからざる事のやうに思はれた。若し大學生が保守的であつたり、士官が無政府主義的であつたりしたら、それこそ不思議な事で且つ不快な事でもあつた。チニンについて考へて見ると、その血統から云つても教育から云つても、彼がして来たやうにすべき筈ではなかつた。リダもノギョザもマリア・イヴノヅナも又彼に近い人達も、彼の事を思ふと、何だか希望を空しくされるやうな不快な感じがした……母親の本能から、彼女はチニンの周圍

に與へる印象にすぐ氣がついた。さうしてそれが心苦しかつた。チニンは母親の心を充分に察してゐた。彼は最初母親を安心させやうと思つた。けれどもどうしたらいゝか分らなかつた。そこで彼は偽の感情をこしらへやうとした。心にもない考を推出さうとした。けれどもそれは全く困難であつた。彼は微笑んだ。ヌツと立ち上つた。それから家の中へ入つた。そこで彼は反省する爲に寢床へ上つた。彼は思つた。人間は此世界をば一つの寺院のやうなものに化して了ひたがつてゐる。一切のものに對して唯一の規則をこしらへ、幾多の條綱を明細に設け、それで箇性の滅却を企てゝゐる。然らざれば古くさい唯一の権力とか神秘的の何物かに全然服従してゐる。彼はキリスト教の立場と運命とを考へて見た。然しながらそれは何だか誠につまらぬものゝやうに思はれた。そこで無意識に假睡して、深更まで眠つて了つた。息子を見送つて、さてマリア・イヴノヅナは嘆息した。さうして今度は自分

が考へはじめた。母は思つた、ザルデインはあからさまにリダに焦れてゐるやうな様子を見せてゐるが、どうかそれが本氣であつてくれ、ばい、がと冀つた。——「リダも既う二十だ。ザルデインは……でなければならぬやうなお人らしい。噂にきくと、今年には中隊長になられるとやら。借債は過分にお有りなさるさうだ。が、どうして私はこんないやな夢なんぞを見るのだらう。ばかぐしいとは思ふのだが、どういふものかそんな事が始終頭へ浮んで来る。」

マリア・イヴノツナはザルデインがはじめて自分の家へ来た日にかういふ夢を見たわけであつた。彼女はリダが眞白な衣服を着て、草や花に蔽れた牧場をゆく姿を想像した。

マリア・イヴノツナは肱懸椅子のうちへ身を落した。お婆さんらしく肱をついて、ながい事、曇つた空に思ひ耽つた。悲しくなる些細なさまぐな考がたえまなく心につきまといつた。母はわびしく感じた。さうして何となく不安でた

まらなくなつた。

燈ともし頃、散歩に出た連中は母家へかへつた。夕かげがたゞよふ園のおくで、賑かな聲々がきこえた。

リダは嬉しさうに顔を眞赤にして、母親のそばへ走せ寄つた。彼女の周圍には川から持つて来た身にしむやうな新鮮な匂と、思ひやりのある若紳士達の前にもるので、非常に亢奮した、いかにも別嬪らしい媚どが散つた。

——お母さん、妾、御飯がたべたいワ。ニツコリした母親にからまつて、リダが叫んだ。それでね、御飯の出来るまで井クトルさんがいろんな歌をうたつて下さるのよ。

マリア・イヴノヅナは夜食の支度をしに行つた。さうして歩き乍ら考へた。リダのやうな目に立つて美しい且つ健康な娘は、どうしたつて幸運でないわけ

にゆくものか。

ザルデインとタナロヴとは座敷へはいると、相續いてピアノの方へ行つた。リダは露臺に据ゑられてあるロツキング・チェア(搖椅子)に腰を落とし、樂々と身を伸した。ノ井コヅは歩くとミシ／＼いふ露臺の板敷を音せぬやうに歩いた。彼れはリダの顔をそつと見た。キリ、と緊つたその喉首、黄ろい靴を穿いたその小さな足、裳裾が開いてチラ／＼見えるその優しい裸。けれどもリダは彼には一向注意もしなかつた。たゞ春機發動期の力強いうつとりとした心持が胸一ばいに充ち／＼てゐた。そして眼をつぶつて、謎のやうに獨笑した。

ノ井コヅの心中はまるで戦闘のやうであつた。彼はリダを愛してゐた。けれども自分をばリダがどう思つてゐてくれるのか、さつぱり見當がつかかなかつた。時には愛してくれてゐるやうにも思へた。時には愛してくれぬやうにも思へた。リダが彼を愛してゐるやうに想像さるゝ時は、あの若いなよ／＼とした

肉體が全く自分の思ふまゝになる日の來るのも、もう目の前にぶら下つてゐるらしく考へられた。然し愛してはくれぬやうに信じらるゝ時には、そんな事を考へるのがあさましくも耻しくも思はれた。さういふ時には肉感といふものが腹立しくて、自分自身がいかにも憐むべく又リダには相應しくないやうに思はれた。大股で歩きながらノギコツは心できめた。

——若し右の足が最後の板敷を踏んだら、それは「ウン」といふ事だらう。然し若し左の足がそこへ行つたら……

そしてそんな事はその時次第で偶然さうなるのだとは彼にはどうしても思ひきれなかつた。

やがて彼は左の足で最後の板敷を踏んだ。冷たい汗が額を濕した。彼は獨り語つた。

——なんだ。ばか／＼しい……まるで婆さんのやうだ……さア、一……二……三……三といふ數で、斷然そばへ行つて云はう……、けれど……どう云はう？ どう云つても同じ事だ……それ、一……二……三……いや、三度目でなければ……一……二……三……一……二……

頭は火のやうになり、口は乾き、胸はどき／＼、脚はふる／＼震へた。やがてリダは目をあげて、煩さうに云つた。

——どし／＼するのをやめて頂戴。きくのに邪魔になるワ。

その時はじめてノギコツはザルデインが歌をうたつてるのに氣がついた。若い士官は今しも古風なロマンスを唱つてゐた。

われ君を愛しき。わが胸の

その愛こそはとほに消えし。

唄は拙くはなかつた。が、素人の癖として、恐しく高い聲をしたり、絶入り

さうな低い聲をしたりして、表情を示さうとした。ザルデインの唄はノギコヅには甚しく不快であつた。

——あれが先生の作曲かね。腹立たしさと怒めしさとで、變な心持になり、彼は口に出して云つた。

——いやよ……邪魔しないで！ 静にしてらつしやい。リダは擲擲面で云ひ足した。あなた音楽がお嫌ひならね、お月様でも見てらつしやい。

なるほど眞赤なまんまるな月が庭の黒い梢から徐々と物凄く上つて來るのが見えた。そのほのかに透明な光輝が石の小徑の上へ流れた。獨笑する娘の顔や衣服の上へ流れた。

庭の影は濃くなつた。森の奥を覗いた時のやうに黒く且つ底深くなつた。

ノギコヅは術なげに歎息した。

——月よりは貴女の方がよつほどいゝ……と云つてすぐ考へた。なぜ自分は

こんなつまらぬ事を云ふんだらう……

リダは高らかに笑つた。

——まア、大袈裟な褒め方ね。

——僕は褒め方なんざ知りません。顔を覺めてノギコヅが答へた。

——まア、黙つてらつしやい……そしてお聴きなさいよ。リダは煩さうに肩をゆすりながら云つた。

さばれその愛は君を苦しめじ

悲しむ君をわれは願はじ……

ピアノの音は水晶を迷らした。縁に濕つた庭の中へ反響した。月は光をました。影は濃くなつた。

下ではサニンが草の上を歩いてゐた。菩提樹の下に佇んでシガレットに火をつけようとしたが、それをやめてジツとしてゐた。あまり静なのでいゝ心持で

あつた。ピアノの調子のいゝ音と、ザルデインの思ひせまつた唄とがきこえたが、その聲は四隣よりんの静けさを破ることなく響いた。

——リダさん！今云はなければ、もう云ふ時はないやうに思はれたので、ノギコヅは不意に叫んだ。

——なによ！庭の方へ眼をむけて、月とその明るい表面へ截取られた黒い小枝とを、夢見るやうに見やりながら、リダは機械的にきゝ返した。

——ずっと以前からです……僕は貴女に云ひたい……と思つてゐました……口早くちはやにノギコヅが云つた。

サニンは聴耳を立てた。そしてその方へ頭をふり向けた。

——どんな事？リダは相變らず氣にもとめずに訊いた。

ザルデインはロマンスを一つ終つたのでしばらくシンとしたが、やがて又別なのをやり出した。彼は非常にいゝ聲を持つてると自信してゐるから、それを

人にきかせたがつてゐたのである。

ノギコヅは自分の顔が赤くなつたり青くなつたりするやうに覺え、たまらなく胸が一ぱいになつて氣が茫として來た。彼は口籠つた。

——僕は……ねえ……リダさん……貴女、僕の妻君になつてくれませんか。

と云ひさして彼は考へた。こんな事は云ふべきぢやなかつた。そしてその言葉と言ひきる前にその答は『否』であらうと思つた。彼はまた、まらなく耻づべき事を仕出かして了つたやうにも思つた。

——ごなたの奥様に？と云つて、リダはサツと赤くなつた。何か云はうとして立ち上つたが、困つた様子をして身を轉じた……月は眞向からその顔を照らした。

——僕は貴女が好きです。ノギコヅは尙口早に云つた。

彼には月が輝かぬやうになつて庭の空氣が胸苦しくなつた。彼の周囲の有ゆるものが皆暗くなつた。

——僕は……僕は何と云つていゝかわかりません……云つたつて仕方がないです……僕は貴女がすきなのです……もう非常に……

「なぜ『もう非常に』なんて云つたのだらう。と彼は思つた。まるでアイスクリームの話でもしてゐるやうに。」

リダは手のうちへ落ちて来た小さな木の葉を焦れたさうに引裂いた。そんな事をきかうとは意外でもあり無益でもあつたので、彼女は狼狽した。きいてはゐられなかつた。さうしてこんな話が出た爲に二人の間へ深淵をこしらへて了つた。リダはこれまで長い間ノボコヴをば親戚のやうに考へて、少しは愛してゐたのであつた。

——ほんとうに……妾、ほんとうに知らない事よ……そんな事は妾思ひ

もよらなかつたワ……

ノボコヴは落膽した……彼は青くなつて立上り、帽子をとつて、『さよなら』と呟いたが、自分の耳へはきこえなかつた。そしてブルブル顫へる唇へばつのわるい微笑を湛へてゐた。

——もう行くんですか……さよなら。リダは當惑して答へた。で、力めて何氣ない微笑を見せながら、手をさし伸べた。

ノボコヴはその手をそゝくさ握りしめて、帽子もかぶらず露に濕つた草原へ眞一文字に大股で歩み去つた。とある小蔭へ来た時に、彼はツと立ちどまつた。そしてやけに髪の毛を掻きむしつた。

——あゝ……あゝ……なせおれはかう不幸なのだ、頭の中が煮えくりかへる……ばかばかしい……自殺しようか……

連絡のないさまじくな考が頭の中で互に相博つた。こんな不幸な、こんな

不名譽な、こんな滑稽な人間はあるまいと自分が感じられた。

その時サニンは彼を呼んで見ようかと思つたが、すぐ思ひこまつてニコリとした。ノギコヴが自分の好きな肩や喉首や手足を持つてる女が自分に身をまかせてくれないので、ほとんど泣きながら髪をかきむしる有様が、彼には馬鹿げて見えた。

それから自分の美しい妹がノギコヴを愛してをらぬとわかつたことが彼には不愉快でなかつた。

リダは暫く同じところにジツとしてゐた。月に照さるゝ臙に白いその半身をばサニンは熱心に凝視めてゐた。

母家の扉口ヘランプの黄ろい光が流れると、ザルデインが現れて、露臺の上へ来た。サニンはやかましい拍車の音をきいた。その間タナロヴは座敷のうちに残つて、じめじめとした低い調子で古風なブルスを弾いた。

ザルデインはやさしくリダのそばへ寄つた。そしてものやわらかにその軀を抱えた。その時サニンは露のやうな月光を横ぎつてゆらめく二つの影法師が唯一つに重なり合ふのを見た。

——何を考へてゐらつしやる。ザルデインはリダの耳元でさゝやいた。彼の眼は火のやうに輝いた。そして娘のきれいな耳の上へ唇を押しあてた。

リダは自分の方へ向く男の首を感じたので、ゾツとした。気が遠くなつた。ひしひしと抱きしめられるたびに、不思議な感覚が湧いた。彼女はザルデインが知識の點からも修養の點からも自分より劣つてゐるといふ事を知つてゐた。それゆゑ彼に従ふ事は決して出来ないと思つた。それと同時に一人の美しい丈夫な男の抱くまゝになる事がいゝ心持でもあり又氣味わるくもあつた。彼女はもの凄しい深淵の底へ身を踊らせて跳込むやうな心持がした。若し妾がふいと體を抛出したら……さうしようと思へば出来るだらう……と思つた。

が、

——いゝわ……と乾き切つた炎ゆるやうな唇を開き、やう／＼呟いた。
 やがてリダはよろめきながら母家へ還つた。
 彼女は今自分が或恐しい者に牽引られて、深淵に近づきつゝあるやうに感じた。

——あんな事は馬鹿げてるワ……あんな事はチツともしたかないのだワ……たゞ一寸ふさげて見たばかりだワ……さうよ、妾は好奇心を起してゐるよ。それが面白いのだワ。それだけの事なの。入口のあかるい板玻璃に照されて、自分の黒い影が反射する鏡の上へ、ヒタと瞳子を据ゑながら、室の中に突立ちつゝ、彼女はしきりに自分で辯解して見た。

リダは頭の上で手を組んだ。さうして、なまめかしく身を伸し、ほつそりしたなよやかな軀や、大きな腰の動くさまを、しげ／＼と見やつた。

ザルデインは一人になり、緊張した心持のいゝ膝の邊がぞく／＼した。彼は半ば眼をつぶり肩を聳し、褐色の口髭の下で、キラキラと齒並を光した。こゝへ一人の幸福な人間が出来上つたのだ。彼の未来はますます／＼歡喜に溢れ幸運に満つるやうに感じられた。

彼はリダが自分に身を委す時の放逸さ熱烈さ何んとも云はれぬ美しさを胸に描いて見た。さうして彼女に對する情慾が愛はしいほど心を壓した。彼がリダに云ひ寄つた時、またその後、思ふまゝに抱きしめさせるやうになつた時でも、リダはいつもおづ／＼してゐた。抱かれてゐる際、娘の眼の中に妙な曇つた炎が輝いた。それがどうやら心の底でザルデインを輕蔑してゐるやうに思はれた。ザルデインにはリダが非常に學識ある女のやうに見えた。今迄關係した女達のやうに自分より一段劣つてゐるものゝやうには考へられなかつた。抱きしめながら、もしやこんな事して侮蔑されやしないかと恐れた。要するにリダを

中空高く深夜を照してゐた。

ザルデインとサニンとは黙つて士官宿泊所の方へ行つた。歩きながらサニンはそつとザルデインの様子を覗つた。否でも應でも殴りつけてやらなければならぬか知らぬなどと考へた。

——うむ……さうだ……と彼はザルデインの住所へ近づくと、ふいに云つた……此世の中には悪漢といふものがある、色々な種類のな……

——と云ふと？ザルデインは眉を揚げながら驚いて訊いた。

——然しそれはそのな……一般に云ふのだが……僕はかう附加へる、悪漢といふものは地球上で一番趣味ある人間ともだ。

——貴兄は何を云つてゐるのですか。ザルデインは微笑みながら云つた。

——勿論さ。僕はね、天下で正直者ほど退屈なものはないといふ事を知つてゐる。正直者とは何だ。正直とか徳義とか云ふものは昔から人の知つてゐる事だ。

だから一向珍しくない……さうして其古臭いものが人間のうちの凡ゆる人格を殺して了ふ。狭くしい退屈な匡のなかへ人間を押込めるからだ……盗むなかれ、欺くなかれ、叛くなかれ、姦淫を犯すなかれ……ところがさういふさまざまな事は元來人間の心の中にあるのだから面白いぢやないか。我々は皆盗をする。嘘をつく。謀叛をする。姦淫を犯す。しようと思へばさう出来るのだ。

——いや、然しながら我々は……とザルデインは漫然と反對した。

——さやうさ。我々はね……君、罪惡を發見しようといふならね、先づ凡ゆる人間の生活を充分に研究しなけりやならんよ……ねえ、たどへば不忠さ……セザルにセザルの席を興へた後に、我々は我々の食卓につくのさ。或は安らかに高臥するのさ。たゞそれだけで我々は謀叛を行ふのさ……

——あなたは一體僕に何を云はれてゐるのですか。少々腹が立つてわれ知ら

らずザルデインが叫んだ。

——さやう……我々は税を拂つてる。我々は兵役に服してゐる。さうぢやないか。然るにそれは何を意味してゐるか。我々は數萬の人々をば戦争といふものや不正といふものへ引渡すのぢやないか……さういふ時吾々の爲に吾々の意見の爲に死滅する人々を助けんとして奔走する代に、人はやすらかに高眠を食つてゐる……而してますます餘計に食物を食つて、此等の人間を饑渴に陥れる。我々が若し道徳高き人間であつたならば、その人々の幸福をば充分に考へてやらなければならぬのだ……而して其他の事は推して知るべしである。それは明白な事だ。ところが悪漢、眞の自由な悪漢はさうぢやない。即ち彼は全く眞面目な而して自然な人間である……

——自然な？

——無論、何となれば彼は人間が自然的にしなければならぬ事ばかりするか

らである……何事も彼を拘束しない。たゞ自分を喜ばす事ばかりするのだ。若し美人が彼に身を委せないならば、たとへ暴力若しくは偽計を設けても自分の物にしなければやまない……而して此れは全く自然である。何となれば歡樂の要求と直覺とはそれによつて人間と動物とを區別すべき類のない特質であるから。動物は動物的であればあるほど、歡樂を理解する事が少くなる。歡樂を理解する事が少くなる。彼等は樂を理解する事が少くなればなるほど、それを求むる能力も少くなる。彼等はたゞ彼等の生活機關を働かすに止つてゐる。吾々について云ふならば、吾々は人間といふものが苦痛の爲に創られてゐないといふ事で一致してゐる。苦痛なるものは決して人間的傾向の理想ではないといふ事で一致してゐる……

——全くです。ザルデインは賛成した。

——そこでだ……歡樂は人生の目的である。天國とは絶對的の歡樂につけた異名である。吾々は皆多少地上の天國を夢見てゐる……或人の曰く、劫初

地上に天國があつたのだと。此傳説は不條理では決してない。而も一の象徴、一の夢想である……然り、とサニンは暫く無言の後、續けて云つた。謹嚴なと、いふものは人間の特色ぢやない。最も眞面目な人間は自己の情慾を隠さぬ人々である。即ち社會生活に於いて惡漢と呼ばれる者共である……それ、たとへば君のやうなものさ……

ザルデインは戰慄した。そしてたち／＼とよろけた。

——さうさ、君の如きものさ。サニンは何にも氣がつかぬふりをしながら續けた。君は世の中で最上の人間だ。少くとも君はさういふ人間であると信じてゐる。ねえ、さうだらう君より上等な人間に君は嘗て遭つた事があるか。

——澤山ある。おど／＼しながらザルデインが答へた。彼はサニンがそれをどこへ持つてゆくつもりかわからなかつた。そして笑つてよいのやら、怒つてよいのやら、それさへ判斷がつかなかつた。

——あるなら、その人を云つて見たまへ。とサニンが云出した、ザルデインは閉口して肩をゆすつた。

——それ、とサニンが面白さうに續けた。君は世の中で最上の人間だ。そして僕も無論同様に最上だ。然るに君も僕も虚偽、窃盜、姦淫、特にその姦淫に對して躊躇するやうな人間ぢやない！

——そりや不……思……議だ。又肩をゆすりながらザルデインが口籠つた。

——君はさう思ふかね？ 聲のうちにむつとした調子を含ませて、サニンがきいた。僕はさうは思はん。さやう。惡漢は最も眞面目な人間で、且つ最も趣味ある人間だ。なぜといふと、人間の卑陋などいふものはハッキリした境界がないものだからね。そして僕は特に一人の惡漢と握手する事を愉快に思ふ……サニンはヒタヒタとザルデインの眼を凝視めながら、甚だ心持のいい様子で彼の手を握つた。そこで不意と顔を擧めながら、全く別な調子になり、

——さよなら、お休み。と云つて立ち去つた。

ザルデインは、暫くそこへ立ちどまつて、遠去りゆくサニンの姿を見送つてゐた。彼はサニンのやうな人間と如何いふ方法で話したらいいものかさつぱり見當がつかかなかつた。そして、たゞ常惑と不安とが彼の心を左右した。やがてリダの事を想出すと、彼はニッコリした、サニンはリダの兄だ。それだから自分に對して兄貴らしい愛情を示したのだ。さういふ心算にちがひない。どさう獨語つた。

——面白い男さな。と彼はサニンがもう或點まで自分に屬してゐるかのやうに満足らしく考へた。そこで彼は格子を開けた。そして月に照さるゝ中庭を横ぎり、自分の營所へ赴いた。

サニンは家へ歸り、着物をぬぎ、寢床へ入つて、リダの室から持つて來た「ザラトウストラ」を讀まうとした。けれど最初の二三頁讀むと、此書物が不快に

なつた誇張した形容詞が一向彼の心に觸れなかつた。彼は唾液を吐いた。そして書物を投げすてたが、やがて深い睡に落ちた。

ニコライ・エゴロギッチ・スプロジッチの息子は莫斯科工藝大學の學生であるが、此小都會に住む地主で且つ退職大佐なる父の家へ歸つた。

彼は或革命黨と關係があるやうに疑はれて、警察の監視の下に莫斯科から送還されたのである。着くまへに、ユライは一通の手紙を認め、彼れの捕縛や、半年の下獄や、追放などの事をば自分の家へ報告して置いたので、家の人達は既に彼れの歸宅を待設けてゐた。

ニコライ・エゴロギッチは別に見るところもあつて、息子の行爲は或子供らしい悪戯にすぎぬのであらうと思つたが、そしてそれがひどく彼れの心を苦しめたのであるが、彼は出来るだけ懇ろに息子を迎へ、小面倒な説明などは努めてきかぬやうにした。

長い二日間、ユライは三等車に揺られとほし、車内に漲る子供等の泣聲や悪臭の爲めにマンシリとする事が出来なかつた。彼は非常に疲れた。彼はやう／＼彼れの父と彼れの妹のリユドミラとに挨拶した。リユドミラは到る處でリヤリヤさんと呼ばれてゐるのだが、これは彼女が幼い時分に自分自身の事をばさう云つてゐたからである。で、彼が一番はじめに思つた事は、妹の寢室へ行つて、寢臺の上へ長々と横になり、少し休息しようといふ一事であつた。彼が目をつきました時には、日はもう落ちてゐた。夕陽の斜めに射す光線が、窓匡の影ぼうしをば壁の上へ斑に紅く描出してゐた。隣の部屋からは、蓋や匙の相觸るゝ音や、リヤリヤの嬉しうな笑聲や、もう一人、誰もわからぬ、優しく樂しげな男の聲がきこえて來た。

彼は最初、まだ列車の内で、進行中窓硝子のガタつく音や、隣室で知らぬ旅客の聲などが響いて來るやうな氣もしたが、すぐそれは誤であることがわかつた。

そこでガバと身を起した。

——あゝ、さうだ。ど、眞黒な、地の厚い、癖のある髪を掻亂しながら、顔を擧めて、彼は呟いた。俺は着いたのだ。

彼は、其時、来たゞけの價打はなかつたと思つた。警察では彼に落ちつく場所を自分で擇べと云つた。が、彼はなせいきなり父の家へ来て暮らす氣になつたのか。ユリイは自分でそれがわからなかつたのである。彼は自分の心へ一番最初に浮んだ土地をば擇んだにすぎないと思つてゐた。ところが實際はさうではなかつた。ユリイはこれまで自分の腕一本で暮らして来た事などは嘗てなかつた。いつも父の仕送りを受けてゐた。それゆゑ何のたよるところもなく唯一人知らぬ他人の中にあるといふ事が、彼には恐かつたのである。彼はさう思ふのが耻かしかつた。さうとは自白したくなかつた。が、此行爲は自分ながら不快ではあつた。家の人達が自分のやつて来た事をば解しもしなければ憂めもせ

ぬのは明らかであつた。其上物質上の問題でも加はつたら、無論父にかゝりすぎるといふ非難などが起つて、彼は到底家の人達と圓滑に暮らす事が出来なくなるであらう。

又二年前に彼れの立去つた此小都會がユリイには甚だ鬱陶しく思はれた。すべてかゝる小郡廳所在地などの住民等は、かの哲學上や政治上の問題をば理解する事も出来ず又それ等に興味をも持てぬ平民としてのみ、彼れの目には映じたのであつた。さういふ問題は彼にとつては人生の唯一の意義であるのだ。

ユリイは寢臺から跳下り、窓へ近寄りざまに、それを開き、庭に向つて身を傾けた。母家に沿うて擴がつた其庭は、恰も錦眼鏡のやうに錯雜れた、紅、青、黄、紫、白、五色さまざまの花に蔽はれてゐた。

其後ろに、一層暗い、一層木深い庭が今一つあつて、此小都會の凡ての庭同様、川の方へだらりと降つてゐたが、其川の表面は丁度青白い鏡のやうにそ

こら邊の植林のうちをばきらくと反射した。透明な黄昏がユリイの心に何となく哀愁を覚えさせた。彼は石造の都會にのみ餘り長く住みすぎた。自分では自然をば愛するつもりであるのだが、さて實際の自然は彼にとつて無内容のものであつた。彼れの感情を和らげもせず、静めもせず、又喜ばしもせず、却てたゞ云ひやうのない、夢のやうな、病的の憧憬を惹起すにすぎなかつた。

——とうとう起きたのね。あんまり早くもない事よ。と、室へ這入るとリヤリヤが云つた。

ユリイは窓から離れた。不慥な自分の地位から生ずる佗しい感じや、落日に唆られた静寂な憂鬱が種となつて、妹の快活な様子や、其苦勞がなさうな聲などが、彼にはいと不快であつた。

——何がそんなに嬉しいんだい。とユリイはそゝろに云つた。

——妙だわねえ。と、びつくりしたやうな、大きな眼を見ひらいて、彼女は

叫んだ。が、同時に、兄の問が恰も何か非常に面白い嬉しくてたまらぬ事を憶出させたらしく、一層愉快さうにカラカラと笑つた。何だつて貴兄は妾の嬉しい事なんか訊くの？妾は退屈なんかしないわ……そんな閑もありやしない。彼女は真面目くさつた顔付をして、自分の云つてゐる事をばいかにも得意さうに、かう附加へた。

——今は本當に面白い時代よ。こんな時に退屈するなんて、實際罪惡だわ……妾は此頃ね、勞働者を教育してゐるのよ。でね、圖書館の事ですつかり時をどられてゐるの。貴兄のお留守中にね、妾達は此土地へ通俗圖書館を設立したんだわ。そしてね、それが非常に具合よく行つてゐるのよ。

これが外の時なら、ユリイは面白くも思つて、注意も惹起したらうが、今は或事が邪魔をするので、一向氣乗がしなかつた。

が、リヤリヤが大真面目になつて、子供らしい嬌態を作りながら、兄の賛成

を待つてゐるので、彼は止を得ず口籠つた。

——本當だ。

——それですもの、どうして妻が退屈なんぞするもんですか。ど、リヤリヤは満足らしく續けた。

——私にはね、すべてが退屈だよ。と、心にもなくユリイが云つた。
彼女は反抗するやうな風を見せた。

——面白いわね、全く。二三時間前、家へ着くかつかないうちに……其儘すぐ睡ついで了つて、それでもう退屈するなんて。

——私にやどうする事も出来ない。それは神様がさせるのだからね。と、ユリイは何となく自慢さうな口付で答へた。楽しんでゐるよりは退屈してゐる方が、彼には却て思慮あるやうに考へられたからである。

——神様がね、神様がね。と、不平らしい様子で、兄の方へ手をあげながら

リヤリヤは鼻を鳴らした。へえ？へえ？

ユリイは自分で心持がよくなつて來た事に氣がつかなくなつた。妹の朗らかな聲や其陽氣な様子が、自分で眞面目だ深刻だと思つてゐた佻しい感情をば、いつのまにか一掃してゐたのであつた。リヤリヤは兄が苦悶してゐるなど、は夢にも信じなかつた。だから兄が何を云つても怒らなかつたのである。

ユリイは快活な妹の顔をジツと見ながら、ニコニコして云つた。

——私は一面向白くない。

リヤリヤは笑つた。恰も兄が非常に面白い事でも云つたやうに。

——さア、悲しい顔をしたお侍さん……面白くなけりや……いゝわよ……面白くなくても、まア、入つしやいよ。妻は貴兄に或若い方を御紹介しますから……それは愉快なお方よ……入つしやい！と、兄の手を握つて、彼女は笑ひながらぐいぐい率ばつた。

——お待ち、其愉快な若い方といふのは誰だい。

——妾のお躰さん。と、朗らかな、さもく嬉しさうな聲で、彼女は兄の顔へ浴びせかけた。と、恍りして又氣恥しさうに、着物を膨ませながら、室の内をぐる／＼廻つた。

ユリイは父及妹自身の手紙で、彼等の町で此頃開業した若い醫師が、リヤリヤの愛を求めてゐるといふ事は承知してゐた。が、それがもう成立して了つたとは知らなかつた。

——さういふ事があるのだ。と、彼は意外な顔をして云つた。こんなに清浄な、こんなに無垢な、此小さなリヤリヤが、もう結婚の約束などして了つたのか、やがて結婚して、一人前の女となり、人の妻になるのか、と考へると、それが彼には不思議でたまらなかつた……で、彼は妹に對して或種の温情を感じると同時に、又云ひがたい憐れさをも覺えたのである。

ユリイは妹の腰を抱へた。そして二人は食堂の方へ行つた。食堂には洋燈があか／＼とついて、其下に丁寧に研かれた大きな自沸鐘が輝いてゐた。ニコライエゴロギツチは見知らぬ若者の側に座つてゐた。壯健な、淺黒い顔の、妙に穿つやうな眼光をした其若者は、ロシア人の典型ではなかつた。

彼は物靜かに立上つて、心地よげにユリイの前に進んだ。

——始めてお目にかゝります……

——アナトリイ・バヴロギツチ・リヤザンツエヴさん。と、滑稽に重々しくリヤリヤが述べて、さて手で劑輕な恰好をして見せた。

——どうかお心安く願ひ致します。と、リヤザンツエヴはおどけた調子で附加へた。

二人は眞摯な友誼を希つて握手した。と、二人の心は直に抱擁しようといふ氣勢を見せたが、それはせずに、たゞ目と目を親しげに注意深く見かはして

それだけでお互に満足の意を表した。

——これがあれの兄だ！と、意外な心持をして、リヤザンツエツが考へた、彼はあのやうにテキバキした、あのやうにブロンドな、あのやうに花々しい、小さなリヤリヤの兄であるから、定めし彼女と同様に、いき／＼して、喜びに充ちた人間であらうと、豫想してゐたのであるが、ユリイは丈が高かつた。瘦せて色が黒かつた。けれどもリヤリヤと同じやうに美しくはあつた。肌理が織やかで、輪廓の正しいところなどは、よく似てゐた。

ユリイの方ではリヤザンツエツを観察して、こんな事を考へた。これが、あの春の曙のやうな清淨無垢な、小さなリヤリヤの娘姿のうちから、一人前の女をば見分出して、それを愛した男なのだ、自分がこれまでにいろんな女を愛したと同じやうな調子で、この男は妹を愛したに違ひない。さう思ふと、彼はリヤザンツエツとリヤリヤとを見るのが心苦しくもなつた。どうやら二人が自

分の心を勘づいてゐるらしくも思はれて。

二人の男は互に云はなければならぬ事があるやうな気がしたのである。ユリイはかう訊いて見たかつた。

——君は本當にリヤリヤを愛するのかね。眞面目であれを愛するのかね……ねえ、若し君があれを欺いたとすりや淺猿しい事だ……あれは實に清淨だからね、實に無邪氣だからね……

又リヤザンツエツはかう答へたかつた。

——さやう、私は貴兄の妹さんを非常に愛します。愛さないぢやあられないのです。どうです。御覽なさい、鮮かなものぢやありませんか。くひつきたくなるぢやありませんか。美しいぢやありませんか。どうです。可愛らしく私を愛してゐるぢやありませんか。あの咽喉の愛嬌つたらないぢやありませんか……さういふ代りに、ユリイは何にも云はなかつた。と、リヤザンツエツが訊い

た。

——貴兄は長い間追放されてるのですか。

——五年間。

部屋を横ぎつて歩いてゐたニコライ・エゴロギッチは、此問答をきいて、ふと立止まつたが、すぐ身を真正にして、又老軍人の正格な調子のついた足取で大股に部屋の中を歩きはじめた。彼はまだ息子の追放について詳細の事は知らなかつた。で、此思懸ない話をきいて、彼の血がサツと頭へ上つたのである。

——何といふ事だ！ と、彼は自分自身で腹が立つた。

リヤリヤは父の此動作がよくわかつた。そしてギクリとした。彼女は争論や葛藤や何か不愉快な事などが起りはせぬかと心配して、話頭を轉じようと試みた。

——何て妾は馬鹿なんでせう。と、彼女は自分自身を叱つた。トリアにさう

云つて置かうとも思はないなんて。

が、リヤザンツエウには事の経緯がわからなかつた。で、リヤリヤが自分にお茶をのみたいがどうかときいた間に答へて置いて、又新にユライへ問をかけた。

——で、貴兄は今何をなさうといふお考ですか。

ニコライ・エゴロギッチは眉を皺めたが、何も云はなかつた……ユライはふと父の沈黙に気がついたが、不意に心がイラついたので、自分の答の結果などは顧慮する閑もなく、つひ答へて了つた。

——今は何にもしない考です。

——どうして何もしないのか。と、ツと立止まつて、ニコライ・エゴロギッチが訊いた。彼は聲を變じなかつたけれど、其言葉のうちには明かに或小言を含んでゐた。

彼れの聲音は明白にかう語つたのである。

「どうしてお前は「何もしたくない」などと云へるのか。お前の良心はどうしてお前にそんな事を平気で云はせるのか、まるで私がいづまでもお前を背負つてゆべき義務でもあるやうに……私の年老つてゐる事や、お前も既ういゝ加減に自分の生活は自分自身で得てゆかなければならん頃だといふやうな事をば、どうしてお前は忘れてゐられるのか。私は何にも云はないが、お前はどうしてそれが自分自身でわからないのか。」

ユリイは父にさう考へる権利があると認めてゐたゞけに、一層鋭く此小言をば感じもし惱みもした。で、それがため大いに彼れの内心が傷けられたのである。

——さやう、何もしません……私は何かしなければならんのでせうか。と彼は峻るやうな調子で答へた。

ニコライ・エゴロピッチは何が苦がい事を云はうとしたが、ジツと憶へて、たゞ肩を聳やかしながら、三たびかの重苦しい激した足取りで、部屋の一隅から一隅へ歩きつゞけるのであつた。彼れの受けた紳士としての教育が息子の歸宅當日に怒る事などをば許さなかつたのである。

ユリイはギラギラした目で父を御つた。彼れの神経は緊張してゐた。そして争論の糸口を捉まへよう／＼としてゐた。さういふ衝突を挑む事は自分でも罪悪であるど承知はしてゐたのだが、彼はもう其執拗く附纏ふ腹立たしさを抑へる事が出来なかつたのである。リヤリヤは殆ど泣出しさうであつた。そして其哀願するやうな眼光を父に向けるより外の術は知らなかつた。リヤザンツエツもどう／＼様子がすつかりわかつた。そこで彼女が可憐さうになり、無器用ながら、突差の間に話頭を轉じた。

此宵はだら／＼と面白くもなく過ぎた。ユリイは自分が政争へ身を投じた事

を批難する父に對して申開きをしない爲に、自ら有罪である事を白狀してゐるのだとは思ひたくなかつた。彼は父が年老つてゐる爲に又進歩に後れてゐる爲に此最も單純極まる事がわからないのだと思つた。で、其老年と其智識の欠乏とについて、彼は夢中になつて父を誹つたものである。

リヤザンツエヴの冗辯は彼には不快であつた。彼は相變らず部屋の内を行たり來たりする父の足取をば、其ギラギラする黒い眼光で意地悪さうに覷つてゐた。

と、丁度食事の時になつて、ノギコヴとイヴノヴとセメノヴとが來た。

セメノヴは肺結核の大學生で、近頃この町へ來たのだが、人に物など教へて日を送つてゐた。彼は痛々しく瘦細つて、甚だ醜くかつた。そして其早くも老込んだ容貌には、目前に死が迫つてゐるといふ、云ひやうのない悲しい影が漂つてゐた。イヴノヴは小學校の先生であるが、これは肩の廣い髪の長い無頓着

な男であつた。

彼等は並木街で一緒に散歩してゐる際、ふとユリイの歸つた噂をきいて、彼に挨拶をしに來たのであつた。

彼等が家の中へ這入ると、一同は活氣づいた。冗談や洒落や笑聲がのべつに出た。食事に臨んで、彼等は盛に飲んだが、中にもセメノヴが一番餘計に飲んだ。

リダ・サニナに拒絶されたノギコヴは、二三日たつと、心がやゝ静まつた。彼は終ひにかう考へた。此拒絶は自分の失策から生じた偶然の結果にすぎないといふのは彼が乙女の心に對して準備する事を知らなかつたからである。さうは考へたものゝ、彼はサニンの家へ行くのが心苦しかつた。

こんな譯で彼は努めて彼女に出會はぬようにしてゐた。それが町中であらうが又知人の宅であらうが。乙女の方では彼を憐れに思つてゐた。彼に對して何

となく罪を犯してゐるやうな氣もしたので、彼女は極力彼を親切に遇した。そこでノギコツは氣を取直して再び希望を抱くやうになつたのである。

——皆さん、一寸申上げたい事があります。と、人々が將に退散しようとした際に彼は云つた。修道院で出合宴會をやらうといふのですがね………どんなもんでせうか。

此修道院は市外にあるのだが、散策にはお定まりの場所であつた。山の上の心持のいゝ景勝の地に位置を占めて、川には近いし、町からはさう遠くもなかつた。のみならずそこへゆく途中の道がよかつた。

リヤリヤは遊ぶ事なら、散策でムれ、水浴でムれ、舟遊でムれ、森の中の道でムれ、何に限らず好きであつたから、夢中になつて賛成した。

——行きますとも、行きますとも………だが、いつの事？それは。出来るなら、明日。

——で、誰々を誘ふのですか。と、リヤザンツエツが訊いた。此散策の計畫は同様に彼をも微笑ましたのである。森の中へ行けば、彼はリヤリヤを接吻する事が出来る。彼女を抱緊める事が出来る。自分の軀と彼女の愛らしい軀——其清淨無垢なところが彼れの Debit を刺撃してゐた軀とをビツタリ感ずる事が出来る。

——さやう………爰に我々は………六人ゐますね………シヤフロツさんを誘ひませう。

——それは誰の事ですか。と、ユリイが訊いた。

——此町にさういふ名前の若い (Stoudiosus) ——大學生——があるのよ。

——それでと………リユドミラ・ニコラエツナさんがジナイダ・カルサボナさんどオルガ・イヴノヅナさんを誘ふのですね。

——それは誰です？ と、ユリイが又訊いた。

リヤリヤは笑ひ出した。

——見たら分かりますよ。と、意味ありげに指の先を接吻しながら、彼女は謎のやうに云つた。

——見たら分る？ と、ユリイはニコリとした。よろしい、見てやらう、見てやらう。

ノギコヅは躊躇したが、やがて平氣を装つて附加へた。

——それからサニン兄妹を誘ひませう。

——リダさんは無論です。と、リヤリヤは叫んだ、彼女はそれほどリダが好きでもないが、ノギコヅの戀を承知してるので、彼を喜ばす爲にさう云つたのである。リヤリヤは自分自身の戀が嬉しくてたまらなかつた。で、周囲の人々にも自分と同様な幸福と満足とを得るやうに希つてゐた。

——さうなつて來ると、あの士官達も誘はなくちやならん。と、イヴノヅが

鋭い聲で云ひ出した。

——え、誘ひませう……多くなればなるほど面白い事よ。

彼等は露臺へ行つた。月は皎々と輝いて、空氣が蕭やかに軟らかであつた。

——何て美しい晩でせう。と、知らず識らずリヤザンツエヴに身を擦付けてリヤリヤが云つた。

彼女はまた彼に歸つてもらひたくなかつたのである。

リヤザンツエヴは許嫁のポツチャリした温い小さな手を轟と握緊めた。

——え、夜は素敵です。と、何でもない言葉へ持つて行つて、彼等二人だけにはわかる、或特別な意味を籠めながら、彼は答へた。

——貴兄方には夜は素晴らしいでせう。と、イヴノヅが低い聲で云つた。私にとつちや睡くなるばかりだ。まア、お休み。

と、彼は往來へ出て歸つて行つた、恰も風車の翼のやうに兩手をブラリと垂

げながら。

續いてノギコヴとセメノヴとが歸つた。リヤザンツエヴは出合宴會の事を相談するどかいふ口實の下にいつまでもく挨拶を交はしてゐた。

——さア、ねんねしませう。彼が出てゆくと、リヤリヤはおどけた調子で云つた。そして溜息を洩らしながら、彼女は月光の美と爽やかな夜の雰圍氣とか其若い花やかな軀をば不承々に引離した。

ユリイは考へた。父はまだ寢に就くまいから、若し二人が顔を合せると、かの面白くもない無用な説明を避けるわけにはゆかなくなるであらう。

——いゝや。と、彼は川の上に濛ふ青い霧へジツと眼を据ゑながらリヤリヤに答へた。いゝや、私は眠くない……私は一寸散歩して来る。

——それは御勝手よ。と、リヤリヤは物やわらかな優しい聲で云つた。そして新に欠伸をしながら、若い雌猫のやうに半分眼を閉ぢ、月を仰いでニッコリ

したが、とうとう意を決して寢に行つた。

ユリイはたつた一人になつて、暫く木々や家々の黒い影を見ながら、身動きもせず突立つてゐたが、やがてセメノヴと同じ方角へ向いて歩き出した。

病學生はまださう遠くまでゆかなかつた。彼は微かな咳を立て、は身を僂めてそろ／＼と歩いた。と、其黒い後影が明るい地面の上へ鮮かに映つて續いた。ユリイは彼に追付いたが、一緒になつて見ると、彼がさつきとは餘程變つてゐるのに氣がついた。食事の際には、セメノヴは誰よりも餘計に笑つたり戯けたりしてゐたのであるが、彼は今ものうげにたゞ／＼と歩いた。そして其皺腹れた咳のうちには、何か彼をば滅却して了ふ害毒のやうな、脅迫する、絶望的な、もの哀しい或物の響があつた。

——あゝ、君だね。と、彼は氣のない聲で云つた。ユリイは其聲をば怨みでも含んでゐるやうにきいたのである。

——私は眠たくないので。御一緒に参りませう。と、ユリイは辨明した。

——一緒に来たまへ。と、セメノヅは素氣なく頷いた。二人は長い間黙々と歩いた。セメノヅは身を曲げて咳ばかりした。

——君、寒くないですか。と、ユリイは其絶望的な咳に襲はれるやうな氣がしはじめたので、たゞさう訊いて見た。

——僕はいつでも寒い。と、セメノヅはむツとして答へた。

ユリイはまごついた、恰もウツカリ腫物へでも觸つた時のやうに。そこで又訊いて見た。

——君は大學を去つてからよほどになりますか。

セメノヅは頓にも答へなかつたが、

——よほどになるね。と、終ひには答へた。

すると、ユリイは大學生間の精神状態について談りはじめた。當時其社會で

最も緊要な問題だと認められてゐる凡ゆる事柄に涉つて談りはじめた。最初はたゞ單純に話してゐたのであるが、やがて段々と昂奮して來て、とう／＼夢中になつて、熱心に論ずるのであつた。

セメノヅは黙つて聽いてゐた。

ユリイは革命思想の衰頽を嘆いた。彼は語りながらいかにも苦しげに其事について悶へた。

——君はベエベルの最近の議論を読みましたか。と、彼は最後に訊いた。

——讀んだよ。と、セメノヅが答へた。

——で、どう思ひますか？

すると、セメノヅは不意に其曲りくねつたステッキをば焦つたさうに振り回した。彼れの影法師も亦大きな黒い腕を動かした。此舉動がユリイをして鷲鳥の不吉な鼓翼をば思ひ浮べさせたのである。

「僕がね？」と、セメノヴはそくそくと口早に云つた。僕はなア、君、僕は死ぬのだよ……」

そして彼は再びステッキを動かしたが、其黒い影も再び肉食鳥のやうな舉動を繰返した。と、今度はセメノヴも自分でそれと氣がついた。

「見給へ。と、苦々しげにセメノヴが云つた。僕の後ろに死神がゐやがる。そいつが僕の一舉一動を窺つてゐやがる……ペエベルが僕にどう感じられるといふのかね……一人の饒舌家が喋くると、又一人の饒舌家が別な事を喋くるのさ。僕にや同じ事だよ。僕は今日か明日のうちに死ぬんだからね……」

學生が喋つてゐる間、ユリイは度を失ひながらも眞面目に悲しさうな顔をして黙つてゐた。彼はさいてゐるのが辛かつた。

病人は續けた。

「君はなア、君は凡ての事が甚だ緊要だと考へてゐる。大學に何が起つた

の、ペエベルが何と云つたの、なご、ね……」

……ところが僕はね、僕はかう考へるのだ。若し君にも僕と同様な事が起つたら、死が近づいてゐるとか、死ぬにきまつてるとかね、さうしたら、ペエベルの言葉だらうが、ニイチエの言葉だらうが、トルストイの言葉だらうが、誰の言葉だらうが、何の意味もありやしない。

セメノヴは黙つた。

月は相變らず皎々と照つてゐた。そして黒い影が絶えず二人の跡を追つた。

「有機體は破壊するのだ……」と、セメノヴは忽ち調子を變じて、弱々しい憐つばい聲で、不意に云つた。

「……どの位僕が死を怖れてゐるか、若し君が知つてくれたならなア、殊に斯ういふ温和な斯ういふ朗らかな晩にね。と、眼をギラ／＼輝かしながら、其醜い憔悴した顔をばユリイの方へ向けて、彼は悲痛に續けた。皆んなは生きてゐる

のだ。そして僕は、僕は死ぬのだ……かういふと、君には平凡にきこえるだらう、きこえなけりやならぬ筈だ……でも、僕は死ぬのだ……小説でもなければ、紙の上へ書いた拵へた真理でもない。僕は本當に死ぬのだよ。そいつは平凡ぢやない、僕はにね……いつか一度は君も亦同じやうに考へるだらう……死ぬのだ……死ぬのだ……そして皆んなそこへ歸着するのだよ……

セメノヅは咳込んだ。

——僕はなア、僕は時々こんな事を考へる、僕は間もなく暗い暗いところへ行つて了ふのだ、冷たい地面の下へ埋まつて了ふのだ、鼻がひしやげて、手がバラバラになつて了ふのだ。そして地面の上には、今僕がまだ生きて歩いてゐるやうに、皆ながゐるのだ……君も此月を見ながら生きてゐるのだらう、呼吸をしてゐるのだらう、僕の墓の前を通つてゐるのだらう。僕の體が下で物凄く腐つて

ゆく間、君は上で五慾を恣にしてゐるのだ。ベエベルやトルストイや其他數萬の獅嚙面が僕にとつちや何だといふのだ！ と、セメノヅは發作のやうに毒々しく叫んだ。

ユリイは動顛して黙つてゐた。

——ちや、左様なら。と、セメノヅは靜に云つた。僕の許は爰だよ。

ユリイは彼と握手しながら、深い深い同情を以て、其窪んだ胸や其折疊まつた肩や制服外套の釦へ引懸けた其太い彎曲したステッキなどを見やつた。彼は友に對して何か慰めるやうな事を云つてやりたいとは思つたが、それは不可能であつた。そこで溜息をつきながら答へた。

——それぢや又。

セメノヅは帽子を揚げて格子戸を開いた。足音や咳が段々遠くなつて、遂に、園庭の中へ消えて了つた。

ユリイは歩みを還した。三十分ほど前には、朗らかにのび／＼して、平和で且つ穏かであつた一切の物が——星空、月光、月光を浴びた白楊樹、神秘めいた物影などが、今彼には、恰も宏大な墓地のやうに、不吉に物凄く、又死のやうに冷たく見えた。

我家へ立歸ると、彼れはそつと自分の寢室へ入りこみ、庭に面する窓を開いた。生まれてからはじめて彼は考へたのである。彼が克己的に献身的に盡瘁して來た一切の事は緊要な問題ではなかつたのだ。彼は思つた。いつか一度は彼も亦セメノヴのやうに死んで了ふのであらう。さうしたら、人間種族が彼の力によつて幸福にならなかつたといふ恨みも、又生涯を賭した尊い理想が地上に實現されなかつたといふ恨みも、共にどこかへ消えて了つて、唯一の恨みが——人生が彼に與へてくれた凡ゆる歡樂を味はぬうちに、見る事も聴く事も感ずる事もすべて止んで了ふ、といふ恨みばかりが残るであらう。

が、彼は自らこんな考を起した事を耻ぢた。で、努めてそれを忘れて或解釋を求めた。

——人生は戦闘である。

然り。けれども誰と戦ふのだ……自分自身と戦ふのでなければ、太陽の下なる自己の一部と戦ふのでなければ……さう考へると、彼れの内心は悲しくなつた。ユリイはもうそんな事は注意しまいと思つた。そして他の事を考へようとしたのであるが、彼れの心はどうしてもそこへ還るのであつた。彼は遺瀨なく感じた。苦痛にたへなくなつた。忌はしい悲しい涙が自づと彼れの胸にこみ上げて來た。

五

リヤリヤ・スヴロジツチの招待状を受取ると、リダ・サニナはそれを彼女の兄に見せた。彼女は兄が此招待をば拒るであらうと思つた。而して拒つてくれた方がいと希つた。彼女は豫想したのである。月光に満された夜の物柔らかさに、川の上などへ赴くと、彼女はどうしてもザルデインの方へ牽付けられなければならぬやうな氣になるであらう。これは彼女にとつては嬉しくもあり氣遣はしくもある樂しみには相違ないけれども、又彼女は一方で兄の手前をば耻しく思つたのである。兄がザルデインに對して心底から侮蔑してゐるのは明らかであつたから。

が、サニンは直に心よく承諾した。

暑くもなく寒くもなく、カラリと晴れた日であつた。空は透徹るやうで、目

が眩むばかりに太陽が反射してゐた。

——丁度いろんな令嬢方もお出で、せうから、貴兄は其人達とお近づきになりますよ。

——そりや結構だ。と、サニンが受けた。それに天氣が馬鹿にいゝ。出掛けよう。

定刻になると、ザルデインとタナロヴとが、二頭の大きな軍馬に曳かせた、騎兵中隊の大馬車に乗つて、やつて來た。

——リデア・ペトロヴナさん、我々はお待ち申してをります。と、スツキリ色の白いザルデインが、香水を芬々させながら叫んだ。

リダは領と帯とに薔薇色の天鵝絨をつけた透明な軽い上衣を着て、小走りに石段を降ると、ザルデインに兩手を差出した。若者は其手を握つて、眼の底へキラリとすはしこい光を湛へながら、暫くジツと彼女を抑へてゐた。

——行きませう、行きませう。と、男の眼光を見てとつて、リダは嬉しさに又耻しさに叫んだ。

二三分たつと、馬車は荒野へ僅に印いた道路をば全速力で走り出した。丈の高草の硬い幹が、輻の下へ折撓められては又起返り、馬の脚をばビシビシと鞭打つた。平原の爽かな風がそよ／＼と馬の鬣か動かしたり、ハリエニシダの大浪小浪を道の兩側へ吹靡かしたりした。

市街を離れると、彼等は今一つの馬車と一緒になつた。それにはリヤリヤとユリイの兩スプロジツチ、リヤザンツエヴ、ノギコヴ、イヴノヴ、それからセメノヴが乗つてゐた。彼等はギツシリつめ込まれて、互に腕を觸合つてゐたが、それが却て彼等を陽氣にした。たゞユリイだけは昨夜の話が残つてゐるので、セメノヴの前にもゐるのが苦痛であつた。セメノヴが他の人々と同様に氣樂らしく戯けたり笑つたりするのが、彼にはをかしくも思はれ不愉快にも思はれた。

いろいろな事を彼れの口からきいた後であるから、ユリイは此病人の笑ふのがわからなかつたのである。

——すると、假態だつたのか知らん。と、セメノヴをそつと視て、ユリイは考へた。人に信じさせてゐたほど悪いのでもないのか知らん。

が、さう考へるとますます／＼わからなくなるので、彼は強ひてそれを忘れようとした。

双方の馬車から、洒落や冗談や世辭などがたえず交換された。ノギコヴは調子に乗つて馬車から跳下り、リダの側について草の中を走つた。暗黙のうちに大袈裟な友情を示さうとする事が、二人の間の例となつて了つたのである。

どう／＼山が見え出した。其上に輝く修道院の圓屋根や白壁がだん／＼にハツキリして來た。山はすべて木叢に蔽はれて、樅の木が毛のやうに縮れて見えた。それと同じやうな樅の木が山麓に在る島々の上にも立つてゐたが、其

間には廣やかな川が悠々と流れた。

馬は道路から外れて、牧場の新鮮な軟かい草の上を疾驅した。草は馬車の轍に靡き伏した。濕つてぶくぶくした地面からは、間近い檜の木、蕙香と錯雑つて水の匂が蒸發した。

約束の場所なる林中の空地には、先着の人々が芝の上に長々と臥そべつて待つてゐた。大學生が一人ど小ロシヤ風の装ひをした二人の若い娘どが、お茶や點心の用意をしてゐるところであつた。

馬は止まつた、鼻息を立てながら、尾で横腹を掃きながら。今着いた人々は馬車や外氣や木と水の匂などに昂奮して、二つの馬車から飛下り、林中の空地へ散つた。

リヤリヤはお茶の用意をしてゐた二人の若い娘に接吻した。リダは慎しやかに彼等にお辭儀をしたが、やがて二人に自分の兄とユリイ・スワロジツチとを

紹介した。此二人の男をば娘達は天真爛漫で而も控目勝な好奇の眼を輝かしながらまじく見てゐたのである。

——さうく……貴兄方もまだお互ひに御存じではなかつたわね。ど、リダは氣がついて云つた。ユリイ・ニコライエ并ツチ・スワロジツチさん、妾は貴兄に兄のヴラディミル・ベトロ并ツチを御紹介致します。

サニンは親しげにニコリして、何の注意をも拂つてゐなかつたユリイと握手した。サニンは誰にでも興味が持てたので、新に知己を拵へる事を好んだ。ユリイはこんな處に面白い人物などゐぬものどきめてゐたので、新知人に對してはいつも冷然としてゐた。

イヴノヴは少しばかりサニンを知つてゐた。そして彼についてきいた事はすべて自分の氣に入つた。で、彼は物珍しさうにサニンを見てゐたが、やがて彼に近づいて話をしはじめた。又セメノヴはたゞ冷やかに手を差伸べたばかりで

あつた。

——さア、これからよ。と、リヤリヤが叫んだ。片苦しい御挨拶は済んだわよ。

彼等のうち二三の人々は生面であつた爲、最初お互にやゝてれ合つてゐたのであるが、いざ行厨を開くといふ段になつて、男達が里古兒酒の數杯を傾け、女達が葡萄酒をチョツピリ嘗めると、其てれ嗅きは太陽氣に代つて了つた。人々は盛に飲んだ。盛に笑つた。盛に洒落れた。そして時々やんやと喝采した。又互に競走をしたり、陵の頂へよち上つたりした。

四邊は靜かに朗らかで、木々は緑に美しかつた。それが爲に暗い影や心配や面白からの氣分などは誰の心にも残らなかつたのである。

——どうです。と、リヤザンツエツはせいせい息を切らして走りながら云つた。人間がいつも此通り駆け出したり躍り上つたりしてゐたら、四百四病の十

分の九はごこかへ消えてなくなつちまひますよ。

——そして罪惡もね。と、リヤリヤが附加へた。

——いや、罪惡はどんな時でも人間には附纏ふでせうよ。と、イブノツが横鎗を入れた。と、誰もそれをば精神的だとも正當だとも思ふ者はなかつたが、異口同音にごツと笑つた。

人々がお茶を飲んでゐる間に、陽は傾いて、川がギラギラと金色に輝き、紅く長い斜光が森林の間に延びた。

——皆さん、小舟へ乗りませう。と、リヤリヤは裳裾を褰げて、最先に立つて、岸邊の方へ駆け出しながら叫んだ。さア、誰が一番早く着くか！

人々は彼女に續いた。或者は走り、或者は適度の歩調をとつて、一同ごツと笑ひ崩れながら、雑色の大端艇の中へ落ちついた。

——解纜よ。と、若々しい聲でリヤリヤが叫んだ。其聲はいかにも陽氣で苦

勢などはなさうに響いた。

小舟は其後ろへ大きな畝を残しつゝ、水の上を這つた。と、其畝は川岸の方へ散亂した。

——ユライ・ニコライエギツチさん、なぜ貴兄は黙つてらつしやるの？と、リダはスプロジツチに訊いた。

——私は何にも云ふ事がないのです。と、ユライはニッコリした。

——どうしていせう？と、男達の氣に入るやうに、頭を後へ傾けながら、リダは媚態を作つた。

——ユライ・ニコライエギツチ君は下らん事をベラベラ喋くるのがお嫌ひです。と、セメノヅが云つた。このお方は……

——あゝさう、このお方は眞面目な問題でなければねえ。と、リダが遮つた。

——御覽なさい、あすこに眞面目な問題がありますよ。と、岸邊を指さしながら、ザルデインが叫んだ。

人々は其方向の險しい場所に立つねぢくれた古い樫の木の根方から、丈の高い雑草に蔽はれた、狭苦しくて陰鬱な黒い穴が一つ、差覗いてゐるのを見た。

——あれは何ですか。と、此國の人間でないシヤフロツが訊いた。

——洞窟です。と、イヴノヅが答へた。

——どういふ洞窟ですか。

——わからんです……人の噂では、昔しあすこに偽造貨幣の工場があつたとか云ひますよ。常例によつて彼等偽造者は悉く捕縛されたさうです……怪しからん「常例」ですな。と、イヴノヅが附加へた。

——然しさういふ常例でもなかつたら、君はすぐ二十哥の偽造貨幣を打出す工場などを拵へるでせう。さうぢやないですか。と、ノギコツが皮肉を云つ

た。

——哥……なアに……留ですよ、君、留です。

——へ、え……、とザルデインは軽く肩を聳かしながら云つた。彼はイヴ
ノヅが嫌ひであつた。そして其冗談がわからなかつた。

——さう……そこで彼等が残らず捕縛されたので、あの洞窟は閉却されて
了つたわけなのです。で、段々に頽廢して、今では誰もあすこへ行く者はあり
ません。子供の時分、私はよくあすこへ攀つて見たものです。それは中々面白
い處ですよ。

——さうでせうね、きつと。と、リダが叫んだ。ドクトル・セルゲイギツチ
さん、貴兄は大膽だから、一寸行つて御覽なさいよ。

彼女の聲は異常に響いた。恰も公然と一同の前でザルデインを嘲弄して、そ
れでかのシリシリと自分を陥れようとする危険な彼れの蠱惑手段に返報するつ

もりでいもあるかのやうに。

——何の爲にです？ と、ごさまぎしながら、ザルデインに訊返した。

——私が行きませう。と、ユリイが申出でた。けれども、人が彼を見え坊ど
解りはせぬかと思つて、彼は赧くなつた。

——うむ、そりや偉い！ と、イヴノヅが稱讚した。

——君も行くのでせう？ と、ノヅが彼に訊いた。

——いや、僕は寧ろ爰に座つてゐよう。

皆は笑つた。

小舟は岸邊に着いた。と、冷たい空気が黒い穴から吹いて来て、彼等の頭を
掠めた。

——ユリイさん、後生だから馬鹿はしないで頂戴よ。と、兄の傍へ擦寄つて
リヤリヤは繰返した。本當に馬鹿をしないで……

——無論、馬鹿さ。と、ユリイはおどけた調子で受けた。セメノヴ君、蠟燭をとつてくれないか。

——どこにある？

——君の後ろの、籠の中にある。

セメノヴは冷然と籠から蠟燭を取り出した。

——貴兄、真面目にお出でになるの？ と、胸膈のガツシリした、大柄な、美しい乙女がユリイに訊いた。リヤリヤは彼女の事をジナさんと呼んでゐたが家族名はカルサギナといふのであつた。

——無論です。行つたつていでせう？ と、平氣を装つて、ユリイは答へた。が、彼は政治上の危険な遊説などに際して、同様に努めて平氣を装つた事を想出したのである。と、此追憶が彼には不快であつた。

洞窟の入口は眞暗でじめ／＼してゐた。サニンは其邊を見廻して、ブルルル

と云つた。彼はユリイが人に見せつけたいばつかりに不愉快な又危険な場所へ降りてゆくのを滑稽だと思つた。ユリイは誰の方へも眼をあげないやうにして蠟燭に火を點した。ふと心の底に、自分は滑稽ぢやないか知らん、といふ考が浮び出て、彼は身震ひしたが、又同時にかうも思つたのである。自分は滑稽どころか却て反對に立派な態度である。驚嘆すべき態度である。従つて女達の心に楽しくもあり心配でもあるかの神秘的の好奇心を惹起せしむるに足るであらう。

彼は嘲笑をうけない用心にニコニコして見せながら、蠟燭のもえ出すのを待つてゐた。それからそ／＼と暗い中へ這入つた。と蠟燭は消えたやうになつた。人々は實際彼れの身を氣遣つた。が、同時に好奇の眼を輝かしてもゐたのである。

——氣をおつけなさいよ、ユリイ・ニコライエギツチさん。と、リヤザンツエ

ツが叫んだ。

——時々狼なごがゐますからね。

——私はビストルを持つてゐます。と、ユリイは答へた。地面の下の彼れの聲は變にポヤツとして響いた。

彼は用心しいく徐に進んで行つた。四壁は低く凹凸して、酒窖の中のやうに濕ッぽかつた。途は時々爪先上りになつたり、だらりと降つたりした。一度二度ユリイは穴の中へ陥りさうになつた。

彼は寧ろ引返した方がよさうに考へた。或はずつと奥まで見届けて來た體を装ふ爲、暫く坐つて時のたつのを待つてやらうかとも思つた。

忽ち粘土の上を滑る或足音とせい〜いふ呼吸とが彼れの後方にきこえた。誰か彼れの跡を跟いて來たのである。ユリイは蠟燭を上げて頭上を見た。

——ジナイダ・バヴロツナさん！と、彼は吃驚して叫んだ。

——え、妾です。と、或穴を跨ぐ爲に上衣を褰しあげながら、カルサギナは樂しげに答へた。

ユリイは其人が慥にかのポツチャリと肥つた快活な美しい乙女であつた事を嬉しく思つた。彼は眼の中へ微笑を湛へながら、シイツと彼女の姿を視た。

——參らうちやムいませんか。と、乙女はやゝ體裁わるさうに云つた。

ユリイはもう危険の事など考へず、カルサギナの足元をば注意深く照らしながら従順しく氣輕に進んだ。

洞窟の壁面は天笠肉桂の色をしたじく〜の粘土であつた。二三箇所人を脅やかす様に窄まつたところもあつたが、其他は樂々と通れるほど兩側が離れてゐた。又そちこちに砂礫や土塊の盛上つてゐるところには、黒い穴が掘返されて、バックリ口を開いてゐた。若い人達の頭上には、大きな土の塊が一つ、落ちんばかりに吊下つてゐたが、それがたゞ不思議に力の籠つた或釣合を保つて

崩れもやらす傾いてゐた。其有様を見ると、思はずぞつと總毛墜つた。

で、空気の重苦しい、暗黒な、此大洞窟の凡ての通路は、皆一つ場所へ落合つてゐた。ユリイは出口を探す爲に其通路をばぐる／＼と巡つて見た。影法師や火影が彼れの後ろにゆら／＼と揺いてゐたが、やがて眞暗な中へ見えなくなつて了つた。成程、二三の出口もあつたけれど、一様に皆塞がつてゐた。

一隅に木の板ぎれが腐つてゐた。それは地中から發掘されて、そこで蠟の生へた、古い棺桶などの板ぎれらしくも思はれた。

——面白い物は何もありませんな。と、ユリイは思はず聲を低くして云つた。かの大きな土塊が上から壓迫するので、彼は息苦しかつたのである。

——同じ事ね。と、炎ゆるやうな眼で周圍を胸しながら、カルサギナは囁いた。

彼女は怖くなつたのである。で、無意識にユリイの側へ擦寄つたが、恰も彼

に保護を求むるもののやうであつた。

ユリイはそれと気がついた。と、ぞつと感したが返上つて来て、此乙女の美しさと穢弱とにそとろ愛憐の情を生じたのである。

——生理にされたやうね。と、カルサギナは續けた。いくら聲を出したつて誰にもきこえないでせう。

——全くです。と、ユリイは微笑んだ。

彼は彼はくらくと眩暈がした。華奢な小ロシア風の肌衣で纏はれた、若い娘のよくよかき腰と其胸のいゝ無肩とが裸めに見えた。と、彼女は全く自分の手の内にあるのだ、而も二人の聲は何人にもきこえないのだ、といふ事が、猛烈に彼の心へ閃めいたのである。彼は一時に目がくらんだ……だが、同時に我と我心と押へつけた。彼は思った。女を手籠めにするなどは以ての事である。彼、ユリイ、スヴロジツキたる者にとつては、全然許すべからざる事

である。そこで、彼れの四肢五體が激烈な情慾に炎上つた瞬間に、生命を賭してもと思ひつめた事をば決行する代りに、彼は云つた。

— やつつけて見ませう。

この異常な聲の顫動が自分ながら恐しかつた。そしてカルサギナがどうやら自分の心を推察したやうにも思はれたのである。

— 何をなさるの？

— 發砲して見ようと思ふのです。と、ユリイはピストルを拿出しながら辨明した。

— 崩れやしないでせうか。

— どうだかわかりません。と、ユリイは崩れる氣遣ひのない事はわかつてゐたのだが、さう答へたのである。貴嬢、恐いですか。

— いゝえ………さア………お撃ちなさい………と、カルサギナはちよいと

身を退けながら云つた。

ユリイは腕を伸ばして發砲した。火花が一トすぢ暗中を劈いた。二人は濛々たる煙に包まれた。と、森嚴な低い反響が、ジーンと長く尾を曳いて、山の方へ消えた。が、頭上の土塊は微動もせず依然として吊下つてゐた。

— 先づこんなものですな。と、ユリイが云つた。

— ちや、參りませう。

二人は歩みを還した。と、カルサギナがユリイに背中を向けたので、其の丸々とした丈夫さうな臀部を見ると、又前と同様なUの形が彼れの血脈中にひらくと炎出して、彼はそれを抑へるのが苦痛であつた。

— ねえ、ジナイダ・バヴロヴナさん。と云つて、彼は自分自身の音聲に憚どした。同時に今持出さうとしてゐる問題が我乍ら恐しくもなつたが、わざと平氣を装つて云つた。爰に一つ面白い心理上の問題があるのです。貴嬢は私と一

緒じよに歩いてゐて、どうして恐こはくなかつたのですか？……貴嬢あなたは今御自分で仰おつしやいましてね、我々われわれがいくら叫さけんでも誰だれにもきこえやしまいつて……然しかるに貴嬢あなたは私わたしを全く御存知ごぞんじないのです……

カルサギナは暗くらい中でサツと赧かくなつた。が、何なんとも答へなかつた。ユリイは苦くるしげに息いきをついた。彼は段々だんだんに深ふかみへ灣すべり込んでゆく時のやうな感かんじがした。そして自みづから愧はちた。

——妾あなたは貴兄あなたを正ただしいお方かただと信しんじてをりました……と、乙女おとめは微かくに口籠くちごもつた。

——で、若もし貴嬢あなたのお考かんがへ間違まちがつてゐたらどうなさる？ と、炎もゆるやうな鋭さい情熱じやうねつに充みたされながら、ユリイが受うけた。ふと此會話このくわいが甚はなだ美うつくしく又甚またはなだ異い様やうに彼かれには思おもはれたのである。

——其時そのときには……妾あなたは身みを投なげて了します……と、カルサギナはいよい

よ赧かくなつて、一ひとしほ低ひかい聲こゑで云いつた。

此言葉このことばをきくと等ひとしぐ、優やさしい／＼哀憐あいきんの情じやうがユリイの胸むねに浸徹しみとほつて、其昂そのあう奮ふんは頓とんに鎮しづまり、悦よろこばしい長閑のほかな心持こころもちになつた。

——何なんといふ秀すてれた女おんなだらう！ と、彼かれはしみ／＼思おもつた。そして其清そのきよらかな情感じやうかんに觸ふれた嬉うれしさに、彼かれれの眼めから涙なみだがハラハラと落おちた。

カルサギナは自じ分の答こたへがいかにも得意とくいらしく、且かつユリイが無言むごんのうち其答そのこたへをば褒ほめてゐる様子やうすなので、嬉うれしさうにニツコリして見みせた。

二人ふたりが出口でぐちの方ほうへ進すすんで行く間あひだ、乙女おとめは、ユリイの言葉ことばが少しも自じ分の心こころを傷きけず、却かえつて身みにしみて樂たのしげに感かんじられた事ことをば、怪あやしく胸むねを騒さわがしつゝ、我われと我われが心こころに訊きいて見みたのである。

六

そこに残つた人々は、カルサギナとユリイの問題について冗談を云合ひながら、洞窟の口で暫く待つてゐたが、やがて岸根傳ひに散つて了つた。男達は巻煙草に火を點けて、水中へ燐寸を抛込んで、川の表面へ擴がつてゆく規則正しい大きな波紋などをまじ／＼と噴つてゐた。

リダは小聲で歌を唱ひながら、草の上を歩いた。又帯に両手を當て、黄いろい半靴を穿いた其小さな足首で、舞踏の歩調をとつた。

リヤリヤは花を摘んではリヤザンツエツに投付け、さて男の眼へ接吻した。

——待つてゐる間に一杯やらうちやありませんか。イヴノツはサニンに云つた。

——そりやい、考だ。と、サニンは賛成した。

二人は小舟の中へ這入つて、麥酒瓶の栓を抜き、チビリ／＼やりはじめた。

——しようもない酔ッばらひ！ と、リヤリヤは彼等に草束を打突けながら云つた。

——素敵だ！ と、たまらなく嬉しさうにイヴノツが叫んだ。

サニンは笑ひ出した。

——僕は人間共がアルコオルに對して防衛しようとしてゐる事をいつも驚嘆してゐるのだ。と、彼は面白さうに云つた。僕の考によればな、酔漢こそ然るべき生き方を知つてゐる唯一の人間だ。

——然り、獸の如くにね。と、ノギコツが岸から叫んだ。

——或は然らん。と、サニンは應じた。けれど、酔漢は自己の欲するまゝを行ひ得る唯一の人間だよ……唱ひたいと思へば唱ふし、踊りたくなれば踊る

のさ……そして彼は自己の歡樂を耻ぢとしない。

——それから又時々喧嘩も始めます。と、リヤザンツエツが突込んだ。

——そりやさうもなる。けれども、それは飲み方を知らんからさ……邪念が
ありすぎるからさ。

——君は酔ッばらつてる時喧嘩をしないかね？ と、ノギコツが訊いた。

——しないね。と、サニンは答へた。僕は寧ろ酔はん時喧嘩する……酔つて
りや、僕は世の中で最も善良な人間さ。何となれば其時や一切の厭な事は忘れ
てるからね。

——人間は皆同じぢやありませんまい。と、リヤザンツエツが再び突込んだ。

——同じでないのが人間にとつての損害だ……僕に限つちや他の者などは
絶對に關係しないね。

——さうは云へるものぢやない。と、ノギコツが云つた。

——なぜ云へんのだらう？ 若しこれが眞理であるならばね？

——美しい眞理ね。と、頭を揺すりながらリヤリヤが叫んだ。

——我輩の知れる限りに於ける最も美しい眞理だ。イヴノツはサニンの代り
に答へた。

——リダは聲高に歌を唱つてゐたが、ふと心配さうな顔をしながら唱ひやめた。

——あの人は随分御ゆつくりね。と、彼女は云つた。

——ゆつくりしてたつていゝぢやないですか。と、イヴノツが揚足をとつた。
何も急ぐ必要はない。

——ジナさんは女丈夫だから恐れるどころもなし……又勿論非難も受けます
まい。と、リダは皮肉に突込んだ。

——タナロツは何か自分で考へて思はず吹出して笑つたが、ハツと氣がついて狼
狽した。

リダは腰の上へ手を當て、軀の調子をとりながら媚態を作り、ジツとタナロツを見やつた。

——どうしたんでせう、本當に？……きつと穴の中で面白がつてゐるんだわと、彼女は肩を聳かしながら、謎のやうに云つた。

——シツ。と、リヤザンツエツが遮つた。

或微かな爆聲が黒い穴の中から洩れて來たのである。

——銃聲！ と、シヤフロツが叫んだ。

——何だつてんでせう？ リヤリヤはリヤザンツエツの腕に絡付き、はや泣聲になつて訊いた。

——安心おしなさい。よしんば狼に出會つたところが、危険などはありませんよ。狼は今頃になると穩しいものですからね……又、一時に二人へ跳懸るものではありません。と、リヤザンツエツは説明したが、心の中で、ユリイも馬

鹿な真似をしたものだ、と思つて、不快に感じた。

——實にどうも！ と、シヤフロツも氣遣はしさうに呟いた。

——あゝ、來たわ。來たわ。騒ぐのはおしなさいよ。と、リダは嘲るやうに唇を動かしながら云つた。

成程足音がきこえて來た。と、間もなく暗い中からカルサナとユリイが姿を現はしたのである。

ユリイは蠟燭を消して、一同の方へニコニコして而も無氣味さうな笑顔を向けた。彼は人々が自分の行爲をばどう思つてゐるか量りかねたのである。彼は粘土に塗れてゐた。カルサナも壁面に打突つたので、亦肩一面が汚れてゐた。

——やア、どうだつたね？ と、セメノヴが面白くもなさうに云つた。

——中々變つてますよ。又見事でもありません。と、ユリイは何か辨疏でもするやうな不安な調子で答へた。たゞ坑の道が塞がつてゐたので、さう奥までゆ

けませんでした。又腐つた板片などがありましたよ……

——貴君方は銃聲をおきしになつて？ と、カルサギナはいき／＼と眼を輝かしながら訊いた。

——諸君、僕等はまだ残らず麥酒を平げて了つた。で、すつかり快い氣持になつてゐるんです。と、小舟の中でイブノダが叫んだ。出掛けませう。

小舟が河心へ出ると、月は既に昇つてゐた。不思議なほど透明で且つ物柔らかな宵であつた。空に、川に、高く又低く、星の燐光が燦然とした揺めいた。舟は恰も茫漠として底のない二大深淵の間に泛んでゐるものゝやうであつた。水中にも又岸上にも、森が黒く蔽さつて、いと／＼しく神秘めいた。鶯が啼いたので、人々は静まり返つた。そして今啼いたのは鳥ではなくて、幸福な、聰明な、空想に富んだ何者かであるやうな心持がしたのであつた。

——なんて美しいんでせう。と、リヤリヤはカルサギナのふつくらした温い

肩の上へ頭を寄せながら、眼を上げて叫んだ。

人々は再び静まり返つて啼音をきいた。玲瓏たる鶯の顫聲は、森に籠り、川に漾ひ、月に煙る恍惚とした牧場の花や小草の上を涉りながら、遙に遠い冷やかなる星空へ消えた。

——どうして啼くんでせう？ と、リヤリヤは再び云ひながら、リヤザンツエグのガツシリした膝の上へ首を落した。と、其接觸が彼には恐しくも又嬉しくも感じられたのである。

——勿論戀の爲です。と、リヤザンツエグは、自分の膝の上へ頼もしげに載せた、軟かい、温かい、其小さな掌をば、優しく自分の手で蔽ひながら、半は冗談に、半は眞面目に、さう答へた。

——かういふ晩には善い事も悪い事も考へたくないわね。と、リダは自分の胸に答へながら云つた。

彼女はかの面白さうな危ない戯れをやつて善いものか或はやつて悪いものかどつおいつしてゐたのである。で、月に照らされてゐる爲に、眼の中へ淡黒い光を堪えて、一層男らしくも見え又一層美しくも見えたザルデインの顔をば、彼女はジツと瞻りながら、惱ましい心弱さと滴るばかりの遺瀾なさを身にしみごと感じた。

——全く別問題です。と、イヴノツが彼女に答へた。

サニンは自分と向合つたカルサギナの膨らんだ胸と眞白な頸とに眼を据えてニツコリした。

山の淡い影が小舟の上へ落ちた。と、銀色に青い水脈をば後へ長く曳きながら、小舟が清光のうちへ潜り入つた時、凡ゆる物が以前よりは大きく、以前よりは自由に、且つ以前よりは輝かしくなつたやうに思はれた。

カルサギナは大きな麥藁帽子を脱いだ。そして其膨らんだ胸をば一層膨らま

して唱ひ出した。量はやゝ乏しいけれど、彼女の聲は高くて旨味があつた。彼女は美しい物悲しいロシア歌を唱つたのである、ロシア歌は概して美しく物悲しいものであるが。

——實に感じがよい。と、イヴノツは呟いた。

——頗る佳い。と、サニンも云つた。

カルサギナが唱ひをはると、一同喝采した。其拍手の音は暗い森に川の表面に凄じく反響した。

——もつと唱つて頂戴よ、ジノチカさん。と、リヤリヤが迫つた。いつそ貴嬢の歌を朗吟して下さいな。

——や、貴嬢は詩人でもあるのですか。と、イヴノツが訊いた。どうして神はたつた一人の人間にさういろんな天才を授けるんでせうなア。

——いけなくつて？ と、カルサギナはてれ隠して冗談を云つた。

「いや、いゝですものよ、サニエが答へた。

「若し愛に一人の乙女があつて、それが貴嬢のやうに美しく又貴女のやうに人を牽付ける事が出来たら、必ずもうそれ以上は望みませぬよ」と、イザノダは身を入れて云つた。

「さア、お吟じなさいよ、ジノチカさんつてば！　と、戀にウツトリとなつてゐたリヤリヤが、頻に懇願した。

カルチチチは極りわるさうに微笑みつゝ、軽く水の方へ振り向いたが、やがてそれ以上は願してもゐず、同様に朝らかな顔聲で吟じはじめた。

戀人よ、戀人よ、我は語らじ、

我は語らじ、わがいかに戀するを。

我はどづわが戀の眼を

わがひめごとを秘置かむとて。

あゝこのひめごと、知る者はあらし……

たゞ惱ましき白日のみ、

たゞしめやかに青き夜のみ、

たゞ黄金なす星の眸子のみ、

たゞ夜のむつごとくに焦れたる、

葉枝鮮けき網目格子のみ

なべてを知れど……さて語らじ

わがひめごとを我戀を……何事をも。

人々は又新に心を奪はれて、狂ふばかりに喝采した。それは詩が美しいからではなかつたので、人々の心の底に戀や幸福や甘い／＼憧憬などが溢るゝばか

りに充ち満ちてゐたからであつた。

—あゝ、夜よ、あゝ、白日よ、而して汝、大いなるジナイダ・バヴロツナ嬢の
 双眼よ、願くは僕の爲に云つてくれたまへ、僕は果して幸福の絶頂に達してゐ
 るかどうか。と、イヴノヴは不意に絶叫した。恰も人々を戦慄させた程、高ら
 かに又だしぬけに、バスの聲で絶叫したのである。

—僕は云はう、君は絶頂になど達してはゐないよ。と、セメノヴが叫んだ。

—あゝ、情けない！ と、イヴノヴは泣き出しさうに云つた。

皆んなは笑つた。

—妾の詩はいやでせう？ と、カルサギナはユリイに訊いた。

彼女の詩にはオリジナリテがない、そして有觸れたいゝんな詩によく似たも
 のだ、と、ユリイは思つたけれども、カルサギナがいかに美しくあつたので、
 それに彼女が其おづおづした意味ありげな眼でいかにも可愛らしく彼を見たの

で、彼は眞顔に答へた。

—私には美しく思はれましたよ。中々調子がよく出来てゐるやうです。

カルサギナは此賞讃の辭が嬉しくてたまらず、自分ながら呆れたやうにニツ
 コリして見せた。

—兄さんはまだジノチカさんがよくお分りにならないのね。と、リヤリヤ
 が云つた。此お方はどこからどこまでお美しく、且音楽的であらつしやるわ。
 —さうですか。と、イヴノヴは嘆じた。

—さうですとも。と、リヤリヤは恰もそれを證明するやうに主張した。お
 聲が美しく、音楽的ですし、此お方自身が美其物ですし、詩がまた美しく、音
 樂的ですし、お名前までがお美しく、音楽的ぢやありませんか。

—實にもう、妙絶、壯麗、薫然たるものですか。と、イヴノヴはウツ
 トリとなつて云つた。其餘は諸君の御推察に委せます。

カルサギナは褒めちぎられて眞紅になり、嬉さうに笑つた。

——そろ／＼帰りませうよ。と、リダは冷やかに云つた。此少女ばかりが無性に褒め立てられるので、彼女は面白くなかつた。カルサギナなどよりも、自分の方がもつと美しく、もつと面白く、又もつと學識がある、と彼女は考へてゐたからである。

——お前は何にも唱つてきかせないのかい？ と、サニンが訊いた。

——いゝえ。と、リダはむツとして答へた。妾はそんな柄ぢやありません。

——ほんに、そろ／＼帰りませう。と、リヤザンツエヅも亦云ひ出した。彼は明朝早く起きて病院へゆき、死體の解剖を手傳はなければならなかつた事を想出したのである。

他の人々はまだもつとゐたいやうな様子であつた。で、歸途は一同疲れてたゞ満足らしく一言も物を云はなかつた。

もう見えなくなつた荒原の雑草は再び馬の脚部を鞭打つた。車輪に蹶立てられた塵埃は馬車の後で雲のやうに卷上つた。

月の光輝に青く煙つた圃地は、坦々として荒寥として其際涯を知らなかつた

……

結婚まで待つてゐたら何が得られるんだらう……それが何の役に立つんだらう……同じ事ぢやないかしら……そんな事を肝腎な事だなんて思ひつめるのは馬鹿げてやしないかしら……

そして其最も面白い部分は既にかの戯れの際に取入れられて了つたので、今度こそは鳥のやうに自由自在となり、それ以上の歡樂や興趣や幸福をば未來に期待する権利があるのだ、と彼女には思はれたのである。

——思ふがまゝに戀を得て……思ふがまゝに戀をすてむ……と、彼女は小聲で唱ひながら、自分の聲はカルサギナの聲よりはずつと美しいと考へて得意であつた。

——さうだわ、あんな事は下らないわ……氣が向けば悪魔にだつて身を任すわよ。と、彼女は我知らずやけになつて、自分の胸に答へた。で、裸の腕を頭の後ろへ投還すと、胸が鳴るほど活潑に身を起した。

——リダ、お前はまだ臥ないのかい？ と、窓の後ろからサニンが聲をかけた。

リダはギョツとして身慄ひしたが、すぐ我に還つて、大きな布帛で肩を蔽ひ、ニツコリしながら窓の方へ行つた。

——叱驚させたわねえ……と、彼女は云つた。

サニンは近寄つて、窓板の縁へ腕を突いた。そして眼をギロギロ輝かしながら、ニヤリと笑つた。

——惜しい事をしたものだ。と、彼は低い聲で面白さうに云つた。

リダは其意を得ぬやうに首を擡げた。

——布帛のない方が、ずつと美しかつたのに。と、サニンは優しい聲で意味ありげに説明した。

リダは呆れて兄の顔を見つめながら、本能的に布帛で身を裹んだ。

サニンは笑ひ出した。リダはごきまぎして窓板へ腕を突いた。と、兄の熱い息が彼女の頬に觸れたのである。

——お前は美しいよ。と、彼が云つた。

リダはチラリと兄の顔を見たが、其顔に現はれた意味が何となくよめたやうに思ふと、ゾツとした。彼女は慌て、身を外向けたが、自分を凝視する兄の眼をば軀中に感じたのである。そしてそれが實に見苦しく又實に怖しく彼女には思はれた。同時に氷のやうな寒さが身内へ擴がつて、彼女の心臓はとき／＼鳴つた。凡ての男はやはりそんな風な眼をして彼女を見つめたのだが、それは彼女には不快ではなかつた。が、其眼光が兄から出て來ると、どうしても有るべからざる事のやうに思はれるのであつた。彼女は努めてニコニコして見せながら云つた。

——妾は知つてます……

サニンは黙々と彼女を眺めてゐた。彼女が窓へ腕を突いた時に、其襯衣と其搭布とが濡つたので、彼は横合から、月に照されて眞白な、極めて艶な彼女の胸をば、少しばかり見る事が出来た。

——人間は恒に自分と幸福との間へ持つて行つて萬里の長城を築いてゐる。と、サニンは低く震へた異常な聲で云つた。其聲はリダをわな／＼と身慄ひさせたのである。

——どんな風にてせう？ と、彼女は暗い庭から眼を離さずに、微かな聲で受けた。何か口には云出せぬ或結果が生じさうに思はれて、彼女は兄の眼光に出會ふのを恐れたのである。

同時に彼女はもう疑はなかつた。其事は何であるか分つた。で、其事が淺猿しくも思はれ又楽しくも思はれたので、彼女は恐しくなつたのである。

彼女の頭は熱した。彼女はもう何も見なかつた。彼女は顚顚の毛を掠める炎

ゆるやうな息を感じ、好奇心を起したり嫌悪の念を起したりした。同時に布帛の下に裸身をば鷺鳥の羽根か何かで撫でられるやうな心持もした。

——まア、こんな風にね……と、サニンは答へた。と、其聲は礎と杜絶えた。リダは軀中に電氣が通るやうに感じた。彼女は身を真直にしたが、無我夢中で卓子へのし懸ると、不意に洋燈を消した。

——寝る時刻だわ。と云つて、彼女は窓を閉めた。

洋燈が消えると、庭は一層明るく見えた。と、サニンの姿が月の白い光を受けていよいよハッキリと浮上つた。彼は露のしとやかな草深い中に立つて笑つてゐた。

リダは窓を離れて、器械的に寢臺の上へ行つて身を落した。一切の事が彼女の心を搔亂した。さまざまの考がごつた返した。彼女は草をざわつかせて遠去りゆくサニンの足音をきいた。そしてごき／＼と鳴る心臓の上へ手を當てた。

——どうしたんだらう？ と、彼女は忌々しげに考へた。妾は氣が狂つたんぢやないかしら？ なんて猥らしいんだらう！ ふいと云つた何でもない言葉が、すぐもう……そんな風にされるなんて……妾は色情狂にでもなつたのかしら？……妾どした事が、こんなに嫌らしい又こんなに腐つた根性にならうとは夢にも思はなかつた！ どうして……こんな事を思はなければならなくなるんだらう……

と、枕の中へ頭を埋めて、リダは忍泣きに泣いた。苦がい涙を流して泣いた……

——何だつて妾は泣くんだらう？ と、彼女は涙の出るわけが分らず、而も自分が不幸で可憐さうで氣がひけてならぬので、さう自分の心へ訊いて見た……

彼女はザルデインに身を任かした爲に、もう以前のやうには堂々たる清淨……

處女ではなくなつたから、それで泣いたのである。又彼女は兄の眼のうちに人を脅かす人を侮蔑する或ひらめきを見たので泣いたのである。彼女は考へた。前には兄は決してあんな風に見た事などはなかつたものだが、たゞ自分が失策をしたばかりで、あゝなつたものに違ひない。

が、何よりも彼女を苦しめた事は、猛烈に彼女を傷つけ彼女を悶へさせた事は、彼女が *Femme* (女)であつたと氣がついた一事であつた。又彼女が美しく若くて健康である間は、男達に身を任かす爲に男達に歡樂を得させる爲に、自分の最上の能力を費やすのであらうと氣がついたからであつた。又其歡樂が彼女にとつても又男達にとつても無量なものであればあるほど、いよゝゝ彼女は男達に侮辱されるのであらうと氣がついたからであつた。

——なぜなのだらう？ 誰が男達にそんな權利を與へたのだらう？……妾だつて同様に自由な人間ぢやないか。と、彼女は部屋のぼんやりした薄暗がりへ

ヒタと眼を据えながら、我どわが心へ訊いて見た。

彼女の若い肉體は彼女の心に絶叫した、彼女にとつて最も楽しい最上の凡ゆる物をば、彼女は人生から探る權利を持つてゐるのだと。又彼女の美しい壯健ないきゝくした肉身が要求する其一切の事を爲す權利をも、彼女は同様に持つてゐるのだと。そして其權利はたゞ彼女にのみ屬してゐるのだと。

が、彼女の考は恰もこんがらかつた網の目を見るやうに彼女の腦中で互に相闘つたのである。と、がつかりして、力がつきて、又くよゝゝと氣が減入つて來た……

ユリイヌプロジッチはずつと以前から繪をかく術に浮身を塞してゐた。彼は繪がすきであつた。そしていつもその術で閑をつぶしてゐた。昔、彼は畫家にならうと考へたものであつたが、最初は金がなかつた事と、其後は政黨に身を委ねた事とが妨げをなして、其道は踏んでゆけなくなつたのである。で、彼は今、判然とした目的もなしに、時たま此藝術に指を染めて見るのであつた。かく判然とした目的がない事と、何の派にも屬してゐない爲に、描いたものが彼を満足させぬばかりではなく、彼を絶望させたり煩悶させたりした。此仕事は自分の氣に入らなかつた時は、ユリイはいつもそれが爲に心を痛めたり苦しんだりした。又それが巧くいつた時には、甘くて且つ鬱陶しい夢の中へ踏込んでゆくやうな心持がした。こんな物はすべて無用だ、自分には成功も幸福も

與へはしないのだ、といふやうな事を考へて。

カルサギナは非常にユリイの心を喜ばした。彼は大柄に肥つて、聲の朗らかな、眼光の可憐な、やゝ感傷的の美女がすきであつた。

彼れの牽きつけられたのは、彼女の心が美しいのと又其清淨無垢な點なので、彼はたいそればかりで、彼女をいとしいとも思ひ好もしいとも思ふのだと、若者は考へてゐたのである。彼女が彼を喜ばしたのは、其肩の爲でもなく、其胸の爲でもなく、其眼の爲でもなく、其聲の爲でもなく、たゞ其清淨潔白な無垢な點のみだと、彼は自ら信じようと努めたのである。さう考へる事が彼には一層高尚でもあり又一層美しくもあるやうに思はれた。其女性の清淨無垢な點が即ち判然と彼れの血のうちに情慾を燃やし立てた始末なのだ。彼が彼女を知つた夕べから、其無垢なところを潰さうといふ慾念が彼れの心に唸めてゐた。で、此 *desir* をば彼は凡ゆる美女の面前に於いて平等に感じてゐたのである。

そこで彼れの思想が花やかな楽しい「生」に充ちた美しい乙女に占領されたので、ユリイは「生」を描かうといふ考を起した。例の通り彼はすぐそれに熱中した、こんどこそは充分に自分の思想を具現する事が出来るであらうと念じながら。

やがて大きな書布が準備せられると、ユリイは遅れては大變だといふやうな調子で大急ぎで仕事にかゝつた。第一の繪具が落とされて、書布が調子のいゝ、淡い斑點に蔽はれると、彼れの心の一切の物は恍惚と自信とでぶる／＼と顛へた。彼はもう自分の製作が細かい部分まであり／＼と眼に見えるやうに思つた。ところが、製作が進めば進むほど、まゝにならぬ技術上の困難が、層一層とさまく／＼に湧上つて來た。彼れの想像力が彼をして書布の上へ美しくも輝かしくも力あるやうにも描かしてゐた一切の物が、光澤のない平凡なものになつて了つた。今はもう彼を牽きつけるどころではなく、細かい部分がたゞ彼を苦しめ

た。と、ユリイは氣がぬけて了つて、とう／＼終ひには粗大な不揃ひな筆法で擲りつけて了つたのである。そこで彼が創出しようと思つてゐた雄大な熱烈な「生」の代りに、全く藝術的價値のない、粗笨な力のない女の半身像が、書布の上へ現はれた。此書のうちには、ユリイが美しいとも新しいとも思つたものは何もなかつた。たゞ凡てが軟弱であつた、卑俗であつた。彼は自分の畫が有觸れたものだと思つた。又自分はムク氏のデッサンを模倣してゐたと氣がついた。又其着想さへ何人かのものであつたと氣がついた。

相變らずユリイは悲しげに沈痛な様子となつた。彼が若し泣くのを恥としなかつたなら、彼は枕へ顔を埋めて身を投出して嘔泣きをしたであらう。彼は誰かに向つて何事かを懇へたく思つたであらう。けれども自分の無氣力については云ひたくはなかつたに違ひない。彼は不快らしい曇つた顔をして、まじまじと自分の書を眺めてゐた。人生は總て退屈で混沌として威嚴のないところだと

考へながら、又人生は彼れユリイをば歡ばし得るやうな何物をも包有してゐなかつたと考へながら。彼は其上こんな小さな都會の中で更に何年も何年も暮らさなければならぬのかと想像して身慄ひした。

——さうすると……死んだものだ！ と、考へて彼はヒヤリとした。

と、彼は「死」を繪にして見たくなつた。そこで庖丁をどつて、内心情けなくはあつたけれど、思ひきつて自作の「生」を削りはじめた。

彼はあれほど酔心地になつてやつつけた自分の仕事が消失せてゆく時にはかうまで骨の折れることを悲しんだ。繪具は不承無承に剝けて行つた。庖丁は擦れたりこつたり又二度ばかり書布へ孔を穿けたりした。ユリイは木炭が油に塗れた表面に跡方もなくなつた事を檢すると、心底から苦痛を覺えた。彼は畫筆を採上げて、先づ黄金石で圖取りをした。それから更にだらりとした物辭かな態度で、臆氣な惱ましさに襲はれながら、繪具を塗りはじめた。今彼れの考へ

た畫面は、其だらけた態度や其陰氣な重苦しい色調によつて、何等の影響も蒙らず、却つてそれが適はしかつた。が、「死」といふ最初の考はおのづから消滅して了つて、今度はユリイは「老年」を描く事になつたのである。彼は焦色の不快な黄昏をば踏みにじられた道路に沿うてよろ／＼と行く肉の落ちた疲れた老女の姿でそれを現はした。地平線には崇嚴な夕方の紫紅色が消失せて、緑が、つた紅色の空には、十字架の陰暗な横向姿が朦朧と影をつくつて浮出してゐた。黒い棺桶があつて、それが骨立した老女の双肩をばへし潰してゐた。そして其濁つた眼光のうちには desolations (荒寥) が睡つてゐた。又其片足は既に眞黒な墓穴の縁に靠れかゝつてゐたのである。

畫面は陰慘たるものであつた。

ユリイは晝食に呼ばれたが、それへもゆかずに仕事を續けてゐた。暫くたつてから、ノギコヅが這入つて來て、何事か彼に話したのだけれど、ユリイは聞

きもせず又答へもしなかつた。

ノギコヅは溜息をついて、装毛安樂椅子の上へ腰を卸した。彼はたゞ一人自分の家にポツリとしてゐた、まれないばかりにスプロジッチの家へ来たのであるから、かうして黙つてゐられる方が却つて勝手であつた。彼は哀しく感じた……リダの拒絶がまだ彼の心を壓迫してゐたのである。自分ではそれが悲しいのか或は單に耻しいのか區別がつかかなかつたけれど。彼は律義で且つノンキな性質だから、リダとザルデインとの問題について既に町中に擴がつてゐた噂には一向お氣がつかかなかつた。で、嫉妬などには苦しめられなかつたが、彼はたゞ自分の幸福な夢がはかなく消失せた事ばかり悶へたのである。

ノギコヅは自分の生涯を誤つたと考へた。けれども、若し果してさうならば、何も骨を折つてこんな生涯を續けてゆく價值はない、など、いふ考は彼の心には起つて來なかつた。反對に彼はかう思つた、自分の生涯は今たゞ苦痛ば

かりとなつたから、それをば他の人々に獻げて、もう自分自身の幸福などは求めまいと。なぜだか自分ながらハツキリわからないが、彼は臆氣に一切を棄て、彼得堡へ赴き、政黨と關係を結び、思ひきつて死地に身を投じようと決心した。この考が彼には氣高くも美しくも思はれた。と、この氣高い美しい考が自分の考だと思ふと、彼の悲痛は和らげられ、同時に嬉しさが込上げて來た。彼は自分の燦爛たる圓光に包まれて偉大になつてゆく姿をば自分の眼に感じたのである。すると心ならずもうかくとリダを誘つてゐた事が泣きたくなるほど淺猿しく感じられた。

やがて彼は退屈しはじめた。スプロジッチは依然として一向彼には頓着なく畫を描いてゐた……ノギコヅは立上つて、畫布に近寄つた。

畫はまだ出來上らなかつた。が、出來上らない爲に、却て力強い草畫の印象を與へたのである。と、丁度、ユリイがもう其先を描けなくなつたのは其刹那

であつた。

ノギコヅは此書を素晴らしいと思つたので、口をあけて、無垢な子供らしい嘆美の眼をあげながら、ジツとユリイを囁つた。

——どうですか？ と、跡じさりしながら、ユリイが訊いた。

彼は自分で考へた、自分の書は、たとへ幾多の欠点があるにしても、又其欠点がかなり重大で且つ歴々たるものであるにしても、自分の今迄に見た書のうちでは一番興味のあるものだなど。ユリイはどこからそんな考が出て來たのか自分ながら分らなかつた。が、若しノギコヅが此書を拙劣だなどと思はうものなら、彼は情なくも思ひ腹が立ちましたであらう。けれども、ノギコヅは恍惚として低い聲で云つた。

——非常に佳いですなア！

ユリイはかの自分自身の創作を貶す天才たらん事を欲した。彼はホツと溜息

をついて、書筆を抛棄てたが、筆はつと走つて裝毛安樂椅子の一隅を汚した。と、彼は書を見向きもせず立離れた。

——なア、君！ と、彼は云つた。

彼はかういふ成功から生ずる不確な掛念や又かういふ幸福な草書が出来やうとはどうしても思はれなかつたといふ覺束ない承認をば自分自身へも又ノギコヅへも自白したくてたまらなかつた。が、一寸考込んでから、彼はたゞかう云つた。

——こんな物は少しも我々の心を向上させませんな。

ノギコヅはユリイをばぶつてゐるのだなと思つた。が、同時に彼自身の悲しみが心中に迫つて來たので、彼はその事を考へた。

——全くね……

と、暫く無言の後、高聲に云ひ足した。

——どうして向上させないのでせう？

ユリイは此間にはてきばき答へかねたので、黙つてゐた。ノギコヴは又一寸書を眺めたが、やがて再び安樂椅子へ腰を落した。

——僕はね、君、僕は「郷土」に載つて君の論文を読みましたよ。頗る手厳しいものですね。と、彼は又問ひかけた。

——なアに、下らんですよ。と答へて、ユリイは自分にもわからぬ不快を感じた。彼はセメノヅの言葉を憶出したのである。あんなものは何の役に立つてせう？ 以前のやうに死刑をも掠奪をも暴行をも沮める力はありませんよ……いくら論説を書いたつて……、人は影響など受けないのです……私はあんなものを書いた事をば遺憾に思ひます……何の爲に書いたんでせう？ 二三人の馬鹿者に讀まれる爲ぢやありませんか……それがどうだといふのです？ 結局、私にとつて何だといふのでせう？ 壁の中へ頭を突込まうとしたつて、それが

どうなるもんでせう？

ユリイの眼前には政治的活動の數年間が展開した。秘密結社、遊説、冒險、蹉跎、彼自身の熱狂、及び自分が救はうと思つた人々の潜まり返つた事など。彼は部屋を横断つて、いかにも侮蔑したやうな冷然たる態度を拵らへた。

——して見ると、何をしたつて苦痛ぢやありませんか。と、ノギコヴの聲がだらしなく響いた。と、サニンの事を憶出したので、彼はかう附加へた。利己主義者ですよ、誰だつて。

——さう、だから骨を折る價打はありませんよ。と、はや部屋のうちの物がすべて灰色に見えはじめた黄昏をば、ユリイはさまざまの追憶に耽りながら熱心に云つた。

——若し我々が人類についていふならばですな。憲法や革命に對する凡ゆる努力は何の役に立つてせうか。恐らく我々の夢見てゐるかの自由なるものは、

其中に將來離れ々々になるべき萌芽を藏してゐるのです。一ト度其理想を實現した人間が退歩して、新に四足で匍ひはじめるやうになるのです……そんな風にして出直さなければならぬものでせうか……で、若し私が自分自身の事ばかり考ふるならば、然る時は……然る時は何が得られるわけでせうか？ 最も都合のいゝ假説を立てれば、私は自分の才能及び活動によつて、名譽なるものを贏得る事が出来るでせう。又自分よりは劣等な人間共の尊敬を受けて、それに酔はされる事が出来るでせう。即ち自分の方では儘に尊む事などの出来がたい、又其尊敬がどうしても此方の心には觸れがたい、といふ人間共の尊敬なんです……そして生きて生きてゆくのです、幕場までね……その先はもうありますまいが……で、結局、禿頭の上へ月桂冠などを載せられて、煩さがぐるぐる落ちてせうよ……

——先生御自分の事ばかり仰しやつてお出でになる。と、ノギコヅは擲擲面

で吐いた。

ユリイはそれに気がつかず、自分で云ふ事を悲しげに自分で聴きつけてゐた。病的な一種の愉快を感じながら。彼には自分の言葉が憂鬱に美しく思はれた。と、高尚な自尊心が胸中に溢れて来た。

——又最も都合が悪くゆく場合には、私は認められざる天才となるでせう。滑稽新聞の題目たる、馬鹿々々しい夢想家となるでせう。無用の長物となるでせう。

——へええ。と、ノギコヅは勝誇るやうに遮つた。そして安樂椅子から身を起した。無用の長物。すると、君は自らそんな事を認めてゐるのですな……

——君は妙だ。と、今度はユリイが遮つた。どうして暮らしていか、又何を信じていか、それが私には分らないのだといふ事を君は御存じですか。若し私が自己の死に依つて天下を救ひ得るものと信じてゐたならば、私は恐らく

自己の幸福をば十字架上に釘付としてゐたでせうよ。けれども私にはさうした信仰がない。よしんば私が何をして見たところが、歴史の徑路を變更させる事などは決して出来ぬでせう。何を私が寄與したところが、どうせ無意識な小さなものにきまつてゐるから、たとへ私があるなくなつても、天下は少しも其大を失ふ事なく、ずん／＼過ぎて行くでせうよ。それにも拘らず、私はさうした微小なる寄與をする爲に、生きて困しみ、悶へ／＼て死を待たなければならぬです。

ユリイは本題から外れて了つた事には氣がつかかなかつた。そしてノギコヅの言葉にはもう答へず、たゞ自分の新しい感情にのみ應じて行つた。彼は忽ちセメノヅの事を憶出して中止した。物凄しい忌はしい身慄ひがゾツと彼れの脊筋を走つた。

君、私がかうした壓迫を蒙つてゐるのですよ。と、彼は低い聲で信ずる

ところあるが如くに云つた。と、暗くなつた窓をばボンヤリ見つめながら、それは當然な事で又どうするわけにもゆかない事だとは私も知つてゐます。けれども私は恐ろしいのです、嫌でたまらないのです。

ノギコヅはそれに違ひないとは思つたが、内心の恐怖をかくして、わざと答へた。

死は必要な生理學上の一現象ですよ。

馬鹿な事をいふ奴だ。と、ユリイは赫としてさう思つた。

彼は腹を立てながら反駁した。

何ですつて? ……我々の死が誰の役に立たうが立つまいが、死は我々をどこへ突落すでせうか。

で、君の十字架にかゝるといふ事は?

さア、それは別問題です。と、不安心らしく答へて、ユリイは一寸逆上

を下げた。

君は自ら矛盾してゐる。と、ノギコツは自分の方が上手だといはぬばかりに悠然として指摘した。

ユリイは其調子が癩に觸つた……彼は黒い地厚の髪の中へ手を突込んで、ぶつくと云つた。

私は決して矛盾してゐません……明々白々な事です、若し私が自分自身の意志で死ぬならば……

同じ事でせう。と、ノギコツは負けずに云ひつゝけた。君は花火のやうな事を望んでゐる。世の喝采を博さうと欲してゐる……要するに利己主義だ！

さう、或は然らん……が、それは此問題には何の關係もない事でせう。議論は混亂した。ユリイは自分の云ふ筈であつたのはこんな事ではなかつたと思つた。が、二三秒前に甚だ適切と思はれた系筋が、もう捉まへられなくな

つて了つたのである。彼はどう反對してやらうかと思つて部屋の中を歩いたが、結局、かういふ場合にいつも考へる事を考へながら、納まつて了つた。

時々具合のわるい事がある。時には自分の云ひたい事が目先にチラつくほどハツキリと云へる事もある。又時には言語が口中へ縛りつけられて了ふやうな事もある。さういふ時には、あちこちへ突懸つた、ぞんざいな物の言方になる……偶然さうなる……

二人は押黙つた。ユリイは部屋の中を大股で歩いてゐたが、窓際で一寸立止まると、帽子をとつた。

散歩しませう。と、彼は云つた。

いゝでせう。と、ノギコツは受けたが、ふとリダ・サニナに出會へさうな希望が生じたので、彼は嬉しいやうな恐しいやうな氣がしたのである。

二人は二度ばかり並木街を往つたり來つたりしたが、知合ひの者には出會はなかつた。そこで相變らず庭園の中で奏してゐる音楽に聴耳を立てゝゐた。音楽は間違つたもので、調子外れだったが、遠くできくと、いかにもなだらかに物柔しく響いた。彼等はさまざまの男女に出遇つた。其男女の高い聲や喧しい笑聲がゆつたりした音楽や黄昏の物軟かな憂愁と對照をなして、それがユリイを催しました。並木街の盡頭で、サニンは彼等に近寄ると、喜ばしうに挨拶した。ユリイは彼が嬉ひだつたので、彼等の談話は勢まなかつた。サニンは眼の面を通る凡ゆる物を嘲つた。彼は終ひにイヴノツと出會つた。と、お互に「出遇けやう」といふ顔付をしあつたのである。

——どこへ行くのかね。と、ノギコツが訊いた。

——友達を御馳走するのさ。と、イヴノツは答へた。彼は衣兜からウオヅカを一本取出して、得意さうに振回した。サニンはカラカラと笑つた。

此ウオヅカと此笑聲とがユリイには平凡に俗悪に思はれた。で、彼は不快らしく脇を向いた。サニンはそれと氣はついたらけれど、何にも云はなかつた。

——あゝ、神よ、僕は此税吏のやうでなかつた事を感謝します。と、イヴノツは不得要領にニヤリとして云つた。

ユリイは眞赤になつた。

——奴は其上に駄洒落までやつてゐる。と、彼は唾でも吐きかけたやうにさう思つた。そこで肩を聳かしながらつと離れた。

——ノギコツ君、無意識のバリサイ人君、我々と一緒に來んか。と、イヴノツは訊いて見た。

——どこへさ。

——ウオヅカを飲みに！

ノギコヅは心配さうな眼光で並木街を見やつた。リダはどこにも見えなかつた。

——リダは家にゐるよ。そして自分の罪を後悔してゐる。と、サニンは笑ひながら口を出した。

——馬鹿な事を。と、ノギコヅは面を曇らして呟いた。僕は心持がわるい。

——君の手を借りないと誰も充分に死ぬ事は出来まい。と、イワノヅが又云つた。が、我々は君に助けられんで火酒を飲む事が出来る。

——酔拂つてやらうか。と、ノギコヅは苦がい思ひをしながら、さう考へたと、大きな聲で云ひ足した。よし、行かう。

彼等を出かけた。ユリイはサニンの掛けかまひがない馴々しい笑聲に錯雜つたイワノヅのぞんざいなバスの聲をばいつまでも聴いてゐた。

彼は並木街に沿うて再び散歩をはじめた。と、女達の聲に呼びとめられた。ジナイダ・カルサギナと女教師のツボワが腰掛の上で彼に近寄れと目くばせをしてゐたのである。日はもう落ちて、黄昏の物影のうちに彼等の顔は殆ど分らなかつた。二人は濃い色の着物を被て、帽子も蒙らず、手に書物を持つてゐた。ユリイはいそぐと彼等と一緒になつた。

——どこからお出でになりました？ と、彼は二人に挨拶しながら訊いた。

——図書館から。と、カルサギナが答へた。

ツボワは黙つて身を退り、若い男の爲に席をあけた。彼は寧ろカルサギナの傍へ腰かけたかつたのだが、仕方なしに醜い女教師と押並んで身を落した。

——貴兄はなぜそんな心配さうな陰気な顔をしてお出でになるのです？ とツボワは癖になつてゐるカサ／＼した薄い唇を尖らしながら訊いた。

——私が心配さうだなど、貴女にはどうしてさう見えるのです？ 私ほど

うして非常に愉快です……が、御尤もです、私は退屈でたまらんですからね。
 —さうでせう。貴兄は何にもなさらないのですか。と、ツボブは見下げたやうに訊いた。

—と、貴女は爲る事がお有りですね？

—えい、えい、泣く暇ありません。

—私だつて泣きませんよ。

—では、空泣きをなさるでせう。と、ツボブは冗談を云つた。

—私のライフは此頃笑ふ事を忘れて了つたやうになつてゐるのです。

彼れの聲のうちには苦がい／＼調子が響いた。それが爲に相手は思はず口を噤んで了つたのである。ユリイは暫く黙つてゐたが、やがてニコリとして、

—私の友人の一人が近頃私に云ひましたよ、私のライフは甚だ教訓的だなんてね。と、彼は云つた。(誰も彼にそんな事を云つたものはないのだが。)

—どういふ意味でせう。と、カルサナは用心深さうに訊いた。

—私の生涯はいかに生存すべからざるかといふ事を教へるからです。

—まア、さう。それを話してきかして下さいな。きつと妾達の参考になるでせうから。と、ツボブが云出した。

ユリイは自分の生涯をば絶對的に失敗したものとして考へた。そして自身身をば飽まで不幸な人間だと信じてゐた。彼はさう考ふるうちに或悲しい満足をみだしてゐたのである。又自分の生涯や人間社會を嘆く事が彼には樂しかつたのである。彼はそんな事をば男達には話さなかつた。云つたつて男達は信じまじといふ氣がしたからである。けれども女達には話した。特に若くて美しい女達には話した。彼は自分の身の上をばこま／＼と嬉しさうに話した。彼は美男で又話上手だつたので、女達はいつても彼に優しい同情を傾けた。

で、此際もまた、始めは冗談であつたのだが、ユリイはおのづと例の調子に

なり、自分の生涯について長々と物語つた。彼れの物語をきいてゐると、彼は恰も周囲の事情に煩はされた偉大なる人物で、又其黨與に了解されなかつた人間らしく思はれた。そして彼が公衆の領袖ともならず、たゞつまらぬ口實の下に追放された凡庸な大學生たるにすぎなかつたのは、廻合せの悪い爲とそれから人類の愚昧なるが爲であつて、彼自身の罪ではないやうに思はれた。ユリイは甚だ自負心の強い凡ての人々と等しく、さういふ事は少しも自分の非凡な力を證するには足らぬもので、天才といへども同様な人間中に生息し、同様な時代の影響を蒙るものだ、とは考へられなかつた。彼ばかりが打勝ちがたい運命に苦しめられてゐるやうにのみ彼には思はれたのである。彼は花やかに鮮明に美しく物語つたので、其物語は自分ながらいかにも本當らしく響いた。乙女達は彼を信じた。又彼を憐んだ。そして彼れの運命を嘆いた。其間をば例の音楽が調子外れに泣くが如くたえず吹奏を續けてゐた。又黄昏は暗く静まり返つて

ゐた。彼等は皆物悲しく夢見心地になつた。ユリイが語りをはると、人生は單調で退屈なところだとも思ひ、又自分は幸福も戀も充分に味はぬうちにまたたく年老つて了ふのであらうとも思つたツボボは、恰も自分自身の考に答ふるものゝやうに、物徐かに訊いた。

——ねえ、ユリイ・ニコライエフツチさん、自殺といふ考が貴兄の心に浮びませんでしたか。

——なぜそんな事をお訊きになるのです？

——なぜと云つて、たゞ……

彼等は黙つた。

——貴兄は Comité (委員會) に屬してお出でですか。と、カルサナは好奇的に訊いて見た。

——え、と、ユリイはいや／＼ながら簡単に答へた。が、此答は乙女の眼

に物凄くも又興味ある光を湛へさせたので、彼は愉快に感じたのである。そこでユリイは二人を家まで送つて行つた。彼等は途すがら喋つたり笑つたりした。物悲しさはどこへか消えて了つた。

——なんて嬉しい方でせう！ と、ユリイが別れると、カルサギナは叫んだ。——ちよいと！ ラヴしちゃいけなくなつてよ。

ツボブは指先で彼女を脅かした。

——いけなくなつて？ と、本能的に内心恐怖を感じながら、カルサギナは絶叫した。

ユリイは甚だ機嫌よく家へ還つた。彼は着手した書面を見たが、それについてはもう何にも感じなかつた。彼は寢に就いた。そして夜どほし美しい若い女の夢ばかり見た。

+

次の日の黄昏、ユリイは昨夜カルサギナとツボブに出會つた場所へ又出掛けた。彼は彼女達と楽しく過した一ト晩の事を終日憶ひ暮らしてゐた。そして再び彼等と邂逅して、同じ問題に觸れ、ジナの柔らかな眼の中に再びかの同情と慈愛との表情を見たいものであると希つた。此夕はカラリと晴れて静かで且つ暖かであつた。乾いた細かな塵埃が町の大氣のうちに立迷つてゐた。で、偶に通る二三の人を除いては、並木街に人影らしいものは見當らなかつた。

ユリイは何か侮辱でも受けたやうな云ひやうのない不快に襲はれて頭を振動かした。そして半靴の端へ眼を落しながら、徐に歩きはじめた。

——なんてつまらないんだらう。と、彼は考へた。おれは何をするつもりかしら。

大學生のシャフロツが手をブラブラ振りながら忙足でやつて来て彼と出會つたが、もう遠くの方から慇懃にニコニコして見せてゐた。

—何だつてこんなところをぶらついてお出でなさいます？ と、立止まつて、力のある大きな手をスヴロジツチへ差伸べながら、彼は愛相よく訊ねた。

—私は退屈してゐるのです……何にもする事がないのでね……で、貴兄は？ どこへお出でなすな？ と、ユリイは怠けた聲で蔑むやうに云つた。彼はいつもかういふ風にシャフロツへ物を言つてゐた。といふのは、彼は Comite の古顔なので、此男をば革命主義を玩ぶ初心な若い學生として考へてゐたからである。

シャフロツは自ら満足してゐるやうに微笑した。

—我々はけふ朗讀をやるのです。と、彼は雑色の表紙がついた薄い小冊子の一束を示しながら云つた。

ユリイは心にもなく其一冊を拿上げて、それを開きながら、社會主義論の乾燥無味な長たらしい序文を讀んだ。其論文は彼も知つてはゐたが久しく忘れてゐたものである。

—で、朗讀はどこでやるのですか。と、ユリイは小冊子を青年の手元へ返しながら、侮るやうにニコリとして訊いた。

—學校でやります。と、シャフロツはカルサギナとツボヴとが奉職する學校の方を指して答へた。

ユリイはリヤリヤが嘗て此朗讀の事をば彼に話したけれども、一向氣にもとめなかつた事など想出した。

—私もお伴が出来ませうか。と、彼はシャフロツに訊いた。

—え、どうか……と、シャフロツは喜ばしさうに微笑しながら、熱心に承諾の意を表した。

彼はユリイをば熱誠な Propagandista (新説唱道者) であると信じてゐた。又彼が政黨中に占めた (この) (役目) を大袈裟に考へて、殆ど崇拜せんばかりに彼を尊敬してゐた。

— 私はさういふ事に多大な興味をもつてゐます。と、ユリイは此宵の時間ふさげが出来た事とそれからカルサギナに逢へる事が特に嬉しく思はれたのでさう附加へなければならぬやうに考へた。

— 是非どうか、是非どうか。と、シヤフログは繰返した。

— ちや、行きませう。

二人は忙いで並木街を横ぎり、橋の方へ向いて行つた。と、橋の畔には大氣が爽かな水分に浸徹つてゐた。やがて學校へ着くと、そこには人々がもう集つてゐた。

卓子と腰掛とが整然と押並んだ未だ薄暗い大廣間には、幻燈の白い映寫幕が

ぼんやりと浮いてゐた。息の窒まるやうな笑聲が盛にきこえた。ほの暗い空と木々の濃緑の梢とが其外に見える窓際には、リヤリヤとツボツボとが立つてゐた。二人はユリイを見つけて、大聲で嬉しうに呼んだ。

— よく來たわねえ。と、リヤリヤが云つた。ツボツボはギユツと彼れの手を握つた。

— なぜまだ始めないのですか。と、ユリイはカルサギナを見つつけようとして廣間を竊視ながら訊いた。

— ジナイダ、バヴロツナさんは朗讀に關係しないのですか。と、彼は興さめ顔に附加へた。

と、映寫幕の傍の演壇の上で、燧寸がバツと點いて、カルサギナの顔が現はれた。彼女は蠟燭に火を點けたのだが、其涼しげな美貌が下の方から照されて、楽しさうに微笑んでゐた。

——關係しちやいけないでせうか。と、彼女は高いところからユリイの方へ手を伸べながら、朗らかな聲で答へた。

彼は彼女に會へたのが嬉しくて、物も云はずに彼女の手を握りしめた。彼女は躍下りる爲に軽く彼れの上へ身を寄せた。と、彼女が彼れに觸れた時、ユリイは彼女の肉體の健康な匂ひを嗅いだ。

——今始めます。と、ジャフログが別室から出て来て云つた。小使が大きな長靴を重々しく曳すりながら部屋を横ぎつて、大洋燈へ一つ／＼火を點けて行つた。と、花やかな光輝が廣間のうちへ漲つた。ジャフログは廊下の扉を開いて、高聲に云つた。

——どうぞ、皆さん。

最初のうちはおづ／＼した足音がきこえてゐたが、やがてそれが急足となつた。そして公衆は廣間へ侵入した。ユリイは好奇心を以つて入來る人々を眺め

てゐたが、例の新説唱道者としての鋭い興趣が湧然として彼れの心に沸起つた。そこには老人も青年も子供もゐた。第一列は誰も腰をかけなかつたが、間もなくユリイの見知らぬ夫人達と見知り越しの學監や男女教員達が其席を占めた。其他の座席は土耳其服や羅紗外套を着た男達や兵士や百姓や女達やそれから粗布の又縁飾のある上衣を着た子供の群が満ち満ちてゐた。

ユリイはカルサギナと押並んで卓子の傍へ座を占め、普通選舉についての或事をば落ちついて而も拙劣に讀むジャフログの言葉に聴耳を立てはじめた。彼の聲は低くて柔かみがなかつた。又彼れの讀んだ物は統計表の特質を帯びてゐた。が、人々は注意深く聴いてゐた。たゞ第一列の學者連だけはちぎに動搖してお互に私語しはじめた。ユリイはそれを不快に感じて、ジャフログを氣の毒に思つた。と、學生が疲れた模様なので、ユリイは低い聲でカルサギナへ云つた。

——跡を私が讀まうと思ひますが、どうでせう。

カルサザナはそつと彼に優しい眼光を投げた。

——それがいゝわ……お読みなさい。

——出過ぎるやうぢやないでせうか。ど、ユリイは人知れずニッコリして見せながら訊いた。

——出過ぎるなんて！ 却つて皆んなが満足するでせうよ。

で、休憩時間を利用して、彼女はシャフロツに其事を話した。シャフロツは疲れてもゐたし又自分の朗讀の拙劣な事を自覺してもゐたので、喜んで承諾した。

——是非どうか、是非どうか。ど、彼は例の調子で繰返しながら、ユリイに席をゆづつた。

ユリイは朗讀がすきでもあつたし又讀方をも心得てゐた。彼は傍目もふらず

演壇へ昇つて、明晰な朗々たる聲で讀みはじめた。一二度彼はカルサザナの方へ願向いたが、其度毎に彼女の意味深い光りある眼と出會つた。ど、やゝごぎまぎしながら控目勝にニッコリして、又書物の方へ目を移し、一層表情的にますます聲を高めて讀んだ。彼は彼女の爲に甚だ面白い良い仕事をやつてのけたやうな氣がしたのである。

彼が讀みをはると、第一列では彼を喝采した。ユリイは公衆の側へ大眞面目に身を屈めて、演壇を降り、さてカルサザナへ心ゆくばかりの微笑を投げた、恰も、「私は貴嬢の爲にやつたのですよ。」と云ふやうに。

公衆は足を踏鳴らして私語をかはし、やがて椅子を動かして、廣間の外へ流出た。ユリイは自分を喝采した二人の奥さんに紹介された。

ど、燈が消えて、部屋は全く暗くなつた。

——どうも有難う。ど、シャフロツはユリイの手を握りしめながら熱心に云

つた。我々の仲間です。いつもあゝいふ風に読んで呉れる者があればいいのですが、なア。

朗讀は彼れの役目だったので、彼は箇人としてユリイに感謝する義務があるやうに感じたのである。たとへ人民の名を以て彼に感謝はしたのではあるけれど。

シヤフロツは「人民」といふ言葉に力を入れてかう云つた。

我々は人民の爲には充分な事はやりませんよ。と、彼は恰も重大なる或秘密をばユリイに洩らすやうな口振で述べた。人間が何かやるのはいい、加減なものです……全く奇體すでな。退屈しきつた貴族達を樂ます爲には、第一流の俳優や聲樂家や演説家等をば澤山に呼寄せるのですけれど、それが人民の爲となると、私見たやうな男に朗讀などをやらせる始末なんですからねえ……と氣のよさうな皮肉な手付をしながら……それで世間は満足してゐるんです。

それ以上には要求しないのです。

全くね。と、ツボヴが云つた。藝術家達のケバケバしい遊戯を褒立てるに全欄を埋めてゐる新聞を見るのは心持のわるいものですわ。そしてかういふところの……

然し佳いものに對しては當然さうあるべきです。と、シヤフロツは大切らしく小冊子を掻集めながら心から云つた。

純なものだ。と、ユリイは考へた。彼はカルサギナの面前にゐる事と多大な成功を収めた事とが嬉しいあまり、此シヤフロツの單純さにはそれほど感じなかつたのである。

——さア、どこへお出でなさいますかと、往來へ出ると、ツボヴが訊いた。戸外は廣間よりもすつと明るかつた。空には星が輝いてゐた。

——シヤフロツさんと妾とはラトツさんの許へ参ります。と、ツボヴが云つ